宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第183集

旭（あさひ）２丁目（ちょうめ）遺跡（いせき）

宮崎地方裁判所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００９

宮崎県埋蔵文化財センター

序　文

旭２丁目遺跡の所在する一帯は、明治期における宮崎県庁の設置以来、近代的な市街地として発展してきた場所であり、現在も宮崎県の中心地として栄えている。それゆえ、我々が実見できる風景は、歴史的な姿を偲ぶものではなく、また、完成された市街地に対しては、発掘調査もままならないというのが現状であった。

このような状況下において、旭２丁目遺跡の発掘調査は、市街地の調査として稀有な事例であるばかりでなく、周辺には、弥生時代の遺跡である宮崎小学校遺跡と別府町遺跡が隣接し、また、宅地化によって消滅したと伝えられる広島古墳群の存在も知られることから、当該周辺域のさらなる歴史の解明と、これら遺跡群がもつ歴史的意義を深める成果が期待されるところであった。

そして、今回の発掘調査の成果として、本書で報告する弥生時代の自然流路や中世から近世にかけての屋敷地などの発見は、当該地域の歴史を紐解く、そして、歴史の１ページを構築する資料を提供することになった。

地下に眠る歴史を顕彰することは我々の努めである。近い将来において、旭２丁目遺跡周辺地域の歴史構造が解明されるためにも、たゆまぬ調査・研究に邁進し、その歴史的意義を明らかにしていく必要がある。そして、その成果を地域にいち早く還元していくことを我々に課せられた責務とする所存である。

最後に、発掘調査ならびに報告書作成にあたって、惜しむことなく御配慮・御援助を寄せて頂いた国土交通省九州地方整備局鹿児島営繕事務所および宮崎地方裁判所をはじめ、関係各位に深謝するとともに、本県の埋蔵文化財保護事業に対する、益々の御理解・御支援を賜らんことを願ってやまない。

2009 年 1 月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長　福永　展幸

例　　言

1　本書は、宮崎地方裁判所増築に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県宮崎市旭２丁目に所在する旭２丁目遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、国土交通省九州地方整備局鹿児島営繕事務所の委託を受けて、宮崎県教育委員会を主体に宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、2007（平成 19）年７月６日から同年９月 10 日まで行った。

3　発掘調査は、調査第二課第四担当主事二宮満夫・同課第三担当主査若松宏一が行った。また、現地調査における図面作成及び写真撮影についても、調査担当者が行った。なお、発掘調査の組織は以下の通りである。

2007(平成19)年度

所長	清野　勉	調査第二課長	石川　悦雄
副所長	加藤　悟郎	調査第二課主幹調査第四担当リーダー	近藤　協
総務課長	宮越　尊	調整担当（文化財課主査）	吉本　正典
総務課主幹総務担当リーダー	高山　正信		

4　整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、二宮が整理作業員の協力を得て行った。

5　基準点測量・グリッド杭設置等の測量業務は、有限会社大淀測量設計事務所に、掘削排土等保管及び復旧業務は、株式会社大淀建設にそれぞれ委託した。

6　自然科学分析は、株式会社古環境研究所に委託し、分析結果については第Ⅳ章に収録した。

7　本書の執筆及び編集は、二宮が行った。なお、整理作業･報告書作成についての組織は、以下の通りである。

2008(平成20)年度

所長	福永　展幸	調査第二課長	石川　悦雄
副所長兼総務課長	長友　英詞	調査第二課主幹調査第四担当リーダー	近藤　協
総務課主幹総務担当リーダー	高山　正信	調整担当（文化財課主査）	東　憲章

8　発掘調査においては、宮崎市教育委員会の埋蔵文化財担当諸氏から、整理作業にあたっては、当センターの職員から有益な助言を得た。また、出土石製品の石材同定については、赤崎広志氏（宮崎県総合博物館）の御教示を得た。

9　調査で出土した遺物、その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1　本書で使用した地図は、国土地理院発行の２万５千分の１図（宮崎北部、宮崎）、宮崎市発行の２千５百分の１図をもとに作成した。

2　本書で使用した方位は、国土座標第Ⅱ系（世界測地系）の座標北、標高については、海抜絶対高を示す。

3　本書で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編 2006『新版　標準土色帖』28 版に準じた。

4　本書における遺構名の表記は、掘立柱建物をＳＢ、柱穴･小穴をＳＨ、土坑をＳＣ、溝をＳＥ、井戸をＳＦ、入口部をＳＺで示し、遺構番号については、遺構検出面名に準じる整数を冠した３～４桁の番号を付した。

5　本書で取り扱う輸入陶磁器のうち、同安窯系青磁と 14 世紀以前の白磁については、太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集、14 世紀以降の白磁については、森田勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2　貿易陶磁研究会、青花については、森毅 1992「青花の分類と呼称」「16 世紀後半から 17 世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第九　財団法人大阪市文化財協会で、それぞれに示された分類と編年に準じた。その他にも、上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2　貿易陶磁研究会、新垣力・瀬戸哲也 2005「沖縄における 14 世紀～ 16 世紀の中国産白磁の再整理」『紀要沖縄埋文研究』３　沖縄県埋蔵文化財センター、小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2　貿易陶磁研究会などを参考にした。

　また、弥生土器については、石川悦雄 1984「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Mk. Ⅱ）」『宮崎考古』第９号　宮崎考古学会、桒畑光博 2000「中溝式土器の再検討－宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年にむけて－」『第 39 回宮崎考古学会例会資料』、肥前系陶磁器については、九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』をそれぞれ参考にした。

　なお、上記以外に本書で参考にした文献については、P.8 に収録しているが、特に本文中において注などで示していない。

本　文　目　次

序

例言

凡例

第Ⅰ章　はじめに

第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1

第２節　発掘調査および整理作業の経過 …… 2

1　発掘調査の経過 …… 2

2　整理作業および報告書作成の経過 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の立地 …… 3

第２節　既往の調査と歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の結果

第１節　発掘調査区の層序 …… 9

第２節　弥生時代後期以前 …… 11

1　遺構の分布 …… 11

2　検出遺構と出土遺物 …… 11

ⅰ）自然流路３期

第３節　中世～近世（第２面） …… 13

1　遺構の分布 …… 13

2　検出遺構と出土遺物 …… 13

ⅰ）掘立柱建物　ⅱ）門

ⅲ）井戸　ⅳ）土坑

ⅴ）溝　ⅵ）入口部

第４節　近代（第１面） …… 20

1　遺構の分布 …… 20

2　検出遺構と出土遺物 …… 21

第５節　遺構に伴わない遺物 …… 22

1　３ｂ層出土の遺物 …… 23

２　３ａ層出土の遺物 …… 23
３　２層出土の遺物 …… 24
４　０層出土の遺物 …… 25
５　その他の出土遺物 …… 27

第Ⅳ章　自然科学分析
第１節　放射性炭素年代測定 …… 28
１　はじめに …… 28
２　試料と方法 …… 28
３　測定結果 …… 28
ⅰ）δ^{13}C 測定値　ⅱ）^{14}C 年代測定値
ⅲ）暦年代（Calendar Age）
４　所見 …… 30
第２節　植物珪酸体分析 …… 30
１　はじめに …… 30
２　試料 …… 30
３　分析法 …… 30
４　分析結果 …… 31
ⅰ）分類群　ⅱ）植物珪酸体の検出状況
５　植物珪酸体分析から推定される植生と環境 …… 32
ⅰ）南壁地点　ⅱ）ＳＣ２０８
第３節　寄生虫卵分析および花粉分析 …… 35
１　はじめに …… 35
２　試料 …… 35
３　分析法 …… 35
４　分析結果 …… 35
ⅰ）寄生虫卵分析　ⅱ）花粉分析
５　考察 …… 36
第４節　珪藻分析 …… 37
１　はじめに …… 37
２　試料 …… 37
３　分析法 …… 37
４　結果 …… 37
ⅰ）分類群　ⅱ）珪藻群集の特徴
５　珪藻分析から推定される堆積環境 …… 38

第Ⅳ章　まとめ …… 41

図 版 目 次

1　調査地遠景
　上　遺跡上空付近から東側日向灘方面を望む
　下　遺跡上空付近から南西側大淀川方面を望む
2　地層断面
　上　西壁地層断面（1）
　下　西壁地層断面（2）
3　弥生時代後期以前の自然流路
　上　自然流路1～3期の堆積状況
　下　自然流路3期出土の弥生土器
4　中世～近世の遺構（一）
　上　遺構全景
　下　西半部の遺構検出状況
5　中世～近世の遺構（二）
　上　SB201とSE201の配置関係（1）
　下　SB201とSE201の配置関係（2）
6　中世～近世の遺構（三）
　上　SF201埋土地層断面
　中　SF202埋土地層断面
　下　SC208埋土地層断面
7　中世～近世の遺構（四）
　上　南半部の遺構検出状況
　中左　SE202検出状況
　中右　SC205埋土地層断面
　下左　SC206検出状況
　下右　SC205検出状況
8　近代の遺構
　上　遺構全景
　下　畝群と盛土間の排水溝
9　自然流路3期・第2面検出遺構出土の遺物
10　第2面検出遺構・第1面畝間溝群・3b層出土の遺物
11　3a層・2層出土の遺物
12　0層・その他出土の遺物

挿 図 目 次

図1　調査地位置図 …… 1
図2　調査地配置図 …… 2
図3　周辺の主要遺跡分布 …… 4
図4　西壁地層断面図 …… 10
図5　自然流路3期の平面図 … 11
図6　自然流路3期出土の弥生土器 …… 12
図7　弥生土器1の出土状況図 …… 12
図8　中世～近世の遺構平面図 …… 14
図9　SB201平断面図 …… 15
図10　門201平断面図 …… 15
図11　SF201・202断面図 …… 16
図12　南半部の遺構平面図 …… 17
図13　SC203・205～208断面図 …… 18
図14　SE201・202断面図 …… 19
図15　中世～近世の遺構出土の遺物 …… 20
図16　近代の遺構平面図 …… 21
図17　畝間溝群出土の遺物 …… 22
図18　3b層出土の遺物 …… 23
図19　3a層出土の遺物 …… 24
図20　2層出土の遺物 …… 25
図21　0層出土の遺物 …… 26
図22　その他出土の遺物 …… 27
図23　暦年較正結果 …… 29
図24　SC208地層断面図 …… 32
図25　植物珪酸体分析結果 …… 33
図26　主要珪藻ダイアグラム … 38
図27　弥生時代中期～後期前半期の遺構分布 …… 41

本 文 写 真 目 次

写真1　調査地周辺〔県庁前通り〕 …… 2
写真2　宮崎八幡宮 …… 6
写真3　SH246と石臼25の出土状況 …… 13
写真4　SH207と白磁小坏16の出土状況 …… 15
写真5　SC208検出時 …… 18
写真6　SZ201検出状況 …… 20
写真7　髪留め42の出土状況 …… 22
写真8　南壁地層断面 …… 32
写真9　植物珪酸体（プラントオパール） …… 34
写真10　花粉・胞子 …… 36
写真11　珪藻 …… 39

表 目 次

表1　植物珪酸体分析結果 …… 33
表2　寄生虫卵分析・花粉分析結果 …… 36
表3　珪藻分析結果 …… 37

第Ⅰ章　はじめに

第１節　発掘調査に至る経緯

宮崎地方裁判所（以下、裁判所）敷地内における庁舎増築工事計画に関しては、2006（平成 18）年度に宮崎県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に対して、裁判所より埋蔵文化財の有無についての照会があったことから、工事計画が明らかとなり、県文化財課では埋蔵文化財保護に関する協議の申し入れを行った。

増築予定地は、当初、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、周辺には弥生時代を主体とする遺構・遺物が発見された宮崎小学校遺跡と別府町遺跡が隣接し、また、宅地化によって消滅した広島古墳群の存在も伝えられることから、当該地においても遺構・遺物が遺存する可能性が高く、開発の際には埋蔵文化財包蔵地として留意する必要が生じた。そこで、県文化財課は、同年度より施工主体である国土交通省九州地方整備局鹿児島営繕事務所（以下、営繕事務所）および裁判所との間で、増築予定地に所在する埋蔵文化財の取り扱いについての協議を開始し、当該地の埋蔵文化財の有無を確認するために、裁判所の協力のもと、同年 10 月に敷地内の空閑地１箇所に対して試掘調査を実施した。この試掘調査の結果、土師質土器類などを含んだ遺物包含層を確認したため、所管の宮崎市教育委員会と協議を行い、当該地を周知の埋蔵文化財包蔵地（旭２丁目遺跡）として取り扱うこととした。

翌 2007（平成 19）年４月、県文化財課はさらなる詳細把握のための確認調査を行い、中近世の遺物包含層を確認し、また、弥生土器の出土もみたことから、周辺域と同じく弥生時代に属する遺構が遺存すると判断した。このため、庁舎増築工事によって影響が及ぶすべての範囲について、本発掘調査を要するとの判断に至り、営繕事務所と宮崎県との間で、「埋蔵文化財発掘調査負担契約書」を同年６月 11 日付で締結し、発掘調査による記録保存の措置をとることになった。

なお、発掘調査の実施については、宮崎県埋蔵文化財センターが担当し、同年７月６日に着手した。

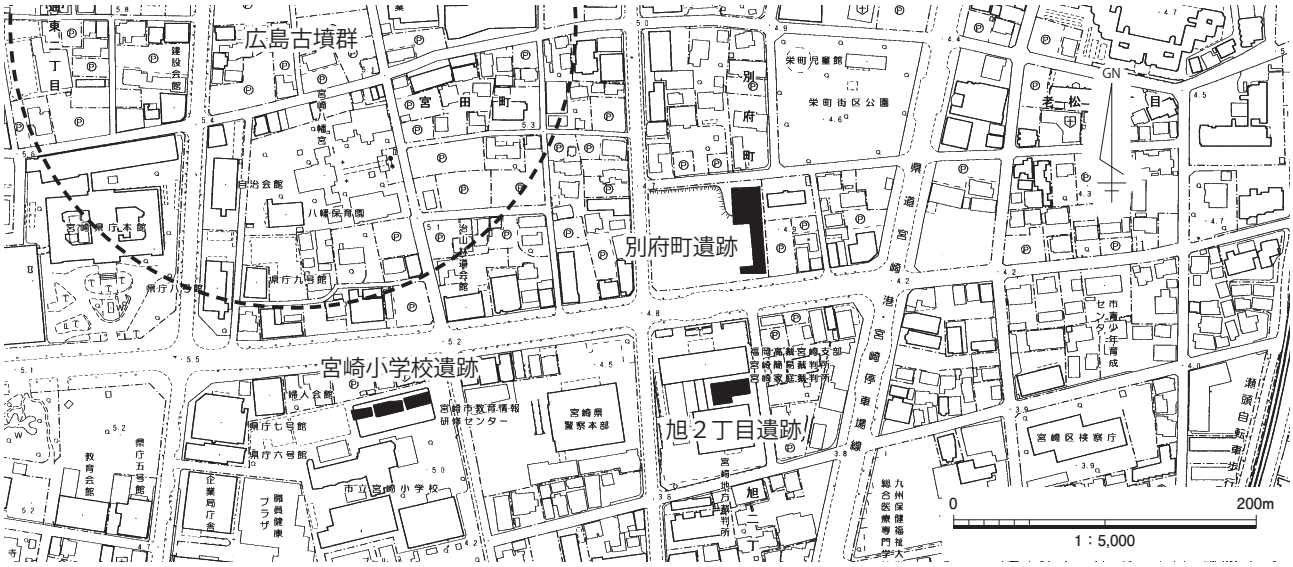


図１　調査地位置図

第２節　発掘調査及び整理作業の経過

１　発掘調査の経過

裁判所敷地内における庁舎増築の予定地は、⌐状に建てられた北側の庁舎（北棟）と南側の庁舎（南棟）によって区画された中庭内であり、現状はアスファルト敷きの駐車場として利用され、西側には南北庁舎をつなぐ渡り廊下が設置されている。試掘および確認調査の結果から、中庭全域をしめる増築予定地のすべてを本発掘調査の対象としたが、本工事まで撤去できない渡り廊下部分と一部車両用通路を残す形で、⌐状の発掘調査区域を設定した。発掘調査面積は、約 285㎡である。なお、掘削作業によって生じた排土の置き場を、敷地内に確保ができなかったことから、別に設けた排土保管場所へ搬出するまでの間、調査区内の最東部約４～９ｍ分を一時的な排土置き場として常時使用した。このため、排土の仮置き部分については、詳細な調査ができなかった。

写真１　調査地周辺〔県庁前通り〕（西から）

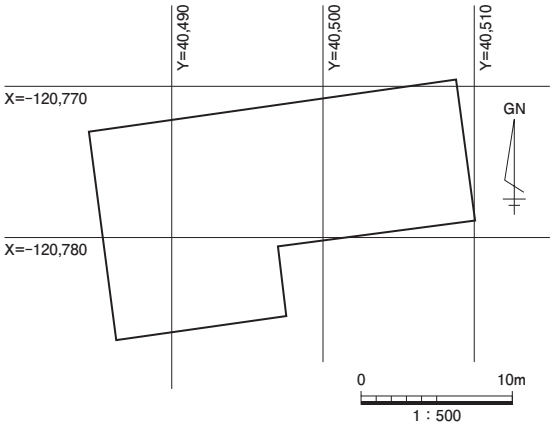


図２　調査地配置図

発掘調査は、2007（平成 19）年７月６日より開始し、アスファルト面の切断を行った後、0.7 ～ 1.6 ｍの厚みで盛られた造成土を重機によって掘り下げた。以後は、人力によって調査を進め、適宜に図面・写真による記録作業を行い、平面的な発掘調査は、屋敷地などを検出した中世～近世と生産域として利用されていた近代における２時期の生活面について実施した。また、旧河道の自然堆積層であった５層以下については、調査区内の数箇所に下層確認トレンチを設けて、断面観察による地層堆積状況の把握に努めた。そして、同年９月 10 日に現地調査に係るすべての作業を終了した。

２　整理作業および報告書作成の経過

現地調査終了後、出土品及び図面・写真などの記録物を宮崎県埋蔵文化財センター本館へ持ち帰り、記録物の整理作業と出土品の一部洗浄作業を行った。本格的な整理作業については、埋蔵文化財センター分館にて 2008（平成 20）年６月２日より開始し、出土品の洗浄・注記作業が終了した後、実測作業に入った。出土品については、約 130 点を図化し、写真撮影を行った。そして、報告書刊行に係る製図及び執筆編集作業のすべてを同年 11 月までに完了させ、翌年１月に印刷・製本作業を行った。

なお、2008 年８月 19 日～９月５日の間、宮崎県立図書館特別展示室を会場とした「ミニ巡回展」にて、発掘調査の成果をパネル展示で紹介し、８月 23 日には、遺跡発掘速報会「ひむかの歴史 2008」において、一般向けに成果報告会を行った。

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の立地

旭２丁目遺跡は宮崎市旭２丁目に所在する。遺跡の周辺域は明治期に宮崎県庁が設置されて以来、官公庁街として発展し、宮崎市域において近代的な市街地化が最も早く進んだ地域である。

遺跡の所在する宮崎市は、県中央のやや南寄りに位置し、東側で日向灘に面する。九州山脈に端を発する山岳地帯を水源とする最北端の一ッ瀬川や都城盆地南の中岳を水源とする中央部の大淀川などが市域を東流して日向灘に注ぎ、それら河川沿いに沖積地が広がることで、宮崎平野の一端をなしている。そして、北部から西部にかけては丘陵地が連なり、南部域は鰐塚山系などの山岳地帯によって占められ、これらを以てして、市域の地勢は構成されている。

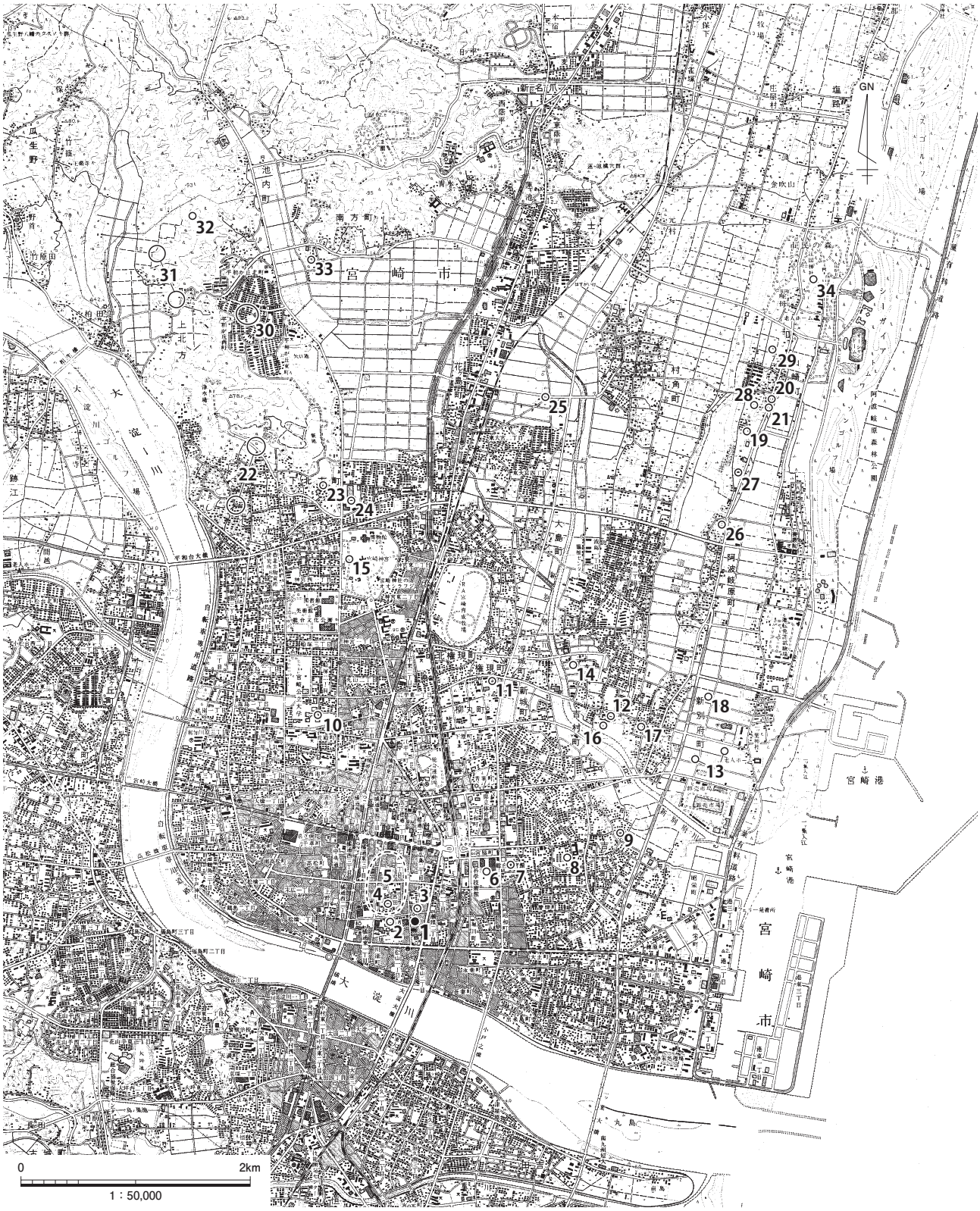
さて、旭２丁目遺跡は、宮崎市街地を蛇行して、最終的に東流する大淀川の左岸、北側約 500 mに位置し、３km ほどで河口に達する。遺跡が所在する大淀川の左岸地帯は、最終氷期以降、海成及び河成作用などによって形成された沖積低地として発達し、自然堤防状の微高地や後背湿地、砂堆などで構成されている。そして、現在は埋没した幾筋もの旧河道の存在が知られ、微高地はこれら旧河道沿いに連続することで大きく発達し、現市街地はこの微高地上に発展している。また、旧河道の名残である新別府川などの支流沿いには、島状の微高地が残り、市域における「～島」という地名に由来している。さらに、この地域を特徴付ける地形として、海面水位の低下に伴って発達した海岸線に並行する砂堆が存在し、先の微高地ともども古くから生活の場として利用されてきた。

第２節　既往の調査と歴史的環境

大淀川河口付近の左岸地域において、人類の生活痕跡を初めてみるのは、縄文時代からであるが、本遺跡の北約２km の地点に所在する宮崎教育大学跡地遺跡が縄文土器の散布地として周知されているのみで、本格的に集落が営まれ始めるのは、弥生時代を迎えてからとなる。

弥生時代になると、先の日向灘に並行する砂堆上において集落が形成されはじめ、なかでも、最も内陸の砂堆南端に立地する檍遺跡では、前期に属する積石墓９基と小児用の甕棺墓３基が発見され、県下においても事例の少ない前期の遺跡として知られている。また、中期後半から後期前半と時代は下るが、杭列を有した水路状遺構とプラントオパールが検出された浮ノ城遺跡が、檍遺跡北西側の低湿地帯に立地し、近隣における水田耕作が想定されている。さらに東隣の砂堆上には、甕棺墓や壺棺墓などを検出した中期から後期にかけての石神遺跡が立地し、県下では類のない石戈の出土が特筆される。また、新別府川右岸の微高地には、後期に属する２軒の竪穴住居跡と周溝状遺構を検出した大町遺跡や溝状遺構から終末期の土器群が出土した中無田遺跡も存在する。

旭２丁目遺跡が立地する微高地上においては、大量の弥生土器が出土した溝状遺構を検出した宮崎小



1：旭２丁目遺跡　2：宮崎小学校遺跡　3：別府町遺跡　4：宮崎八幡宮　5：広島古墳群　6：浄土江遺跡　7：宮脇第２遺跡　8：大町遺跡　9：北中遺跡　10：宮崎教育大学跡地遺跡　11：中無田遺跡　12：檍遺跡　13：池開・江口遺跡　14：浮ノ城遺跡　15：舟塚古墳　16：檍１号墳　17：麓２号墳　18：檍３号墳　19：檍４号墳　20：檍５号墳　21：檍６号墳　22：下北方古墳群　23：下郷遺跡　24：垣下遺跡　25：桜町遺跡　26：猿野遺跡　27：石神遺跡　28：山崎下ノ原第１遺跡　29：山崎上ノ原第２遺跡　30：池内横穴墓群　31：上北方横穴墓群　32：宮崎城址　33：奈古神社　34：江田神社

図３　周辺の主要遺跡分布

学校遺跡が西200ｍほどの地点に、竪穴住居１軒を検出した別府町遺跡が約100ｍ北に隣接して位置し、両遺跡ともに弥生時代中期から後期前半に属している。また、両遺跡では水田耕作の可能性を考えるに十分な量のプラントオパールが検出され、明瞭な水田遺構こそ発見されていないが、周辺における水田域の広がりを想起させる。さらには、本遺跡の北約４㎞の地点、後に古墳群が展開した下北方丘陵の突端部において、前期末から後期後半にかけて内と外で２時期の掘削が認められた環濠集落、下郷遺跡が立地し、眼下の低地では木製農具などが出土した垣下遺跡が位置する。

ついで、古墳時代では、旭２丁目遺跡から北東約650ｍに位置する浄土江遺跡において、後期を中心に奈良時代まで続く30軒余りの竪穴住居が確認され、さらに、浄土江遺跡の西700ｍほどには、約60軒もの竪穴住居が検出された大町遺跡が位置し、後期中葉から100年にも満たないほどの短期間で集落の機能を終えている。また、北中遺跡では、中期から後期にかけての竪穴住居16軒に加えて、後期後半から飛鳥時代にかけての地下式横穴墓10基が発見され、砂州上に構築された地下式横穴墓として注目される。また、本遺跡の北西一帯には、宅地化によって消滅したと伝えられる広島古墳群の存在があり、内行花文鏡や画文帯神獣鏡のほか、武具や馬具などが古墳群出土の遺物として現存し、先の浄土江遺跡との関係が指摘されている。

古墳群については、本遺跡から北約４kmの丘陵上に展開する下北方古墳群があり、中期半ばから後期後半までの間に地下式横穴墓を混在させながら前方後円墳４基と円墳12基を造営する。[注1] なかでも、７号墳の墳丘下に築かれた、県下最大級の５号地下式横穴墓では、武器・武具・馬具・鏡・装飾品など、一級の副葬品類が発見された。さらに、古墳群の北側の同一丘陵上には、池内横穴墓群と上北方横穴墓群が造営されている。また、新別府川の左岸地帯一帯には、前方後円墳２基と十数基の円墳で構成される、檍古墳群が微高地あるいは砂堆上に展開し、なかでも、近年発掘調査が実施された１号墳は、纒向類型の前方後円墳であることと主体部に木槨を採用していたとの報告があり注目された。

その他の古墳時代集落としては、弥生時代の集落も展開した新別府川左岸の砂堆上に立地する、布留式並行の土器群と竪穴住居11軒を検出した猿野遺跡、中期後半から飛鳥時代にかかる竪穴住居約60軒を検出した山崎上ノ原第２遺跡などがあり、なかでも、金銅装張馬具などを有した馬の埋葬土坑群を検出した山崎下ノ原第１遺跡は特筆される。

律令制導入以後の大淀川の左岸地帯は、『和名類聚抄』にある宮崎郡に属していたと考えられ、宮崎郡江田郷には官社江田神社（延喜式で式内社）があり、現在も日向灘に並行する内側から２列目の砂堆上の突端付近、宮崎市阿波岐原に鎮座する。周辺における古代の様相としては、新しく形成された集落跡は少なく、古墳時代から続くものが多い。江田神社の南側で同じ砂堆上に立地する山崎上ノ原第２遺跡では、２軒の竪穴住居のほか、「勾」と墨書された土師器坏が発見され、さらに、神社の南約2.5kmの距離にある猿野遺跡では、布目瓦の出土が特筆される。これらの事例も踏まえて、江田神社周辺には、郡家や駅家（広田駅か）などの官施設が存在した可能性が指摘されている。以上は大淀川の左岸地帯でも新別府川以北における古代の様相であるが、以南における古代の様相は、前代から継続する北中遺跡や浄土江遺跡などの集落跡のほか、宮脇第２遺跡などの新たに営まれる集落も出現し、集落域が拡散する様子が見て取れる。また、９～10世紀に比定される掘立柱建物群を検出した桜町遺跡では、緑釉陶器や県内初となる長沙窯産の水注などの出土が特記され、官施設のひとつと目されている。

平安時代末期になると、日向国においても荘園公領制が発達しはじめる。『八幡宇佐宮御神領大鏡』

写真２　宮崎八幡宮（西から）

によると、永承年間（1046 ～ 53）、国司海為隆によって、宮崎郡内郡家院の荒野が開発され、豊前宇佐八幡宮に寄進したことで、宮崎荘が立券したとされる。また、同じ頃には、渡別符・竹崎別符・村角別符の３別符が、さらなる宇佐宮領として同荘から分立しており、旭２丁目遺跡が所在する一帯は、このうち渡別符の比定地に属し、宇佐八幡宮領として荒野の開発が行われたと考えられる。(注２) また、日向国内において八幡宮領が成立すると、宮崎荘の総鎮守である奈古八幡社（現・奈古神社）をはじめ、各地に八幡社が勧請され、本遺跡の約 300 m北西にも、宮崎八幡宮が鎮座し、現在も厚い信仰を受けている。(注３)

しかし、鎌倉時代になると、日向国周辺は幕府の強い影響下にあったことが知られており、宇佐八幡宮領である宮崎荘には、源頼朝の側近、中原親能（ちかよし）が地頭として補任(注４)されていたことが、『日向国建久図田帳』（建久８（1197）年作成、以下『図田帳』）にみることができる。そして、仁治２（1241）年の関東下知状（田中教忠氏旧蔵文書）によると、すでにこの頃には、宮崎荘は宇佐八幡宮領から関東御領に転換しており、その後、鎌倉時代後期から南北朝期中期頃までの宮崎荘地頭職としては、大友氏庶家の戸次（べっき）氏の手中にあり、長らく宮崎荘は日向国における大友氏の支配拠点とされたことが知られる。しかし、観応の擾乱（1350 年前後）後には、足利尊氏によって島津氏庶家樺山氏に宮崎荘の地頭職が給与されることになった。(注５)

さて、古代以来、宮崎平野部において広く活動を展開してきた土豪土持氏は、南北朝期に大墓別符（現在の宮崎市大塚町付近）を所領として安堵され、また、建武３（1336）年に攻め落とした宮崎池内城とその周辺域も所有しており、宮崎周辺に強い影響力を有していた。(注６)

一方、鎌倉時代中期以降に、日向国へ下向した伊東氏庶家は、国内に所領をなして国人領主化する。その後、南北朝の争乱を契機に下向した伊東氏本宗家によって、反発もあったが国人領主化した庶家が取り込まれ、諸県荘と都於郡を拠点にして宮崎平野部へと勢力を伸ばし、版図を拡大しはじめていった。

なお、渡別符ほか宮崎荘から分立した３別符は、宇佐宮下宮直料所であったが、至徳年間（1384 － 87）に伊東薩摩守祐守に押領され以来、宇佐宮領としての機能は失っている。(注７)

室町時代になると、日向国守護に補任された島津氏久は、大淀川以南地域に侵攻し、本格的に日向国の領国化を目指しはじめる。この島津氏の北進に対して、伊東氏は土持氏と協力して対抗し、以後、大淀川以南地域を中心に宮崎周辺は、島津・伊東両氏による争奪の地となるが、文安元（1444）年から領国拡大に乗り出した伊東祐堯・祐国によって、宮崎平野の大方は伊東氏が支配するところとなった。(注８)

天正５（1577）年、島津氏との争いに敗れた伊東氏が豊後に敗走すると、日向国は名実ともに島津氏の領国となった。その後、宮崎地頭に補任された上井覚兼が宮崎城に入城し、日向国の支配体制が確立した。

鎌倉時代以後の支配階級層の動向は、上記以外にも文献資料によってかなり詳しく知ることができる。しかし、大淀川左岸地帯における考古学的な中世期の状況は、元和元（1615）年の一国一城令により廃された宮崎城などの山城が遺構として残るのみで、(注９) さらなる歴史を構築するほどの成果を発掘調査からは得られていないのが現状であった。しかし、近年調査された海岸線近くに立地する池開・江口遺跡

において、15 世紀を中心に 16 世紀まで存続する、大溝で方形に区画された掘立柱建物群が検出され、大淀川左岸地域における中世集落の様相を知る上で貴重な発見となった。

さて、豊臣秀吉との九州合戦における島津氏敗北後の宮崎地域は、秀吉の九州仕置により後の延岡藩主高橋元種の所領となったが、江戸時代になると度々の延岡藩主の転封に伴って、分村や幕府領への編入などが行われた。しかし、延享４（1747）年に内藤氏が入封して以来は、延岡藩領として幕末を迎えている。

江戸時代、旭２丁目遺跡の所在地は、上別府村のうちにあり、延岡藩領期には、藩が設置した宮崎代官所管轄の大島組に属しており、同村には組の郷倉も置かれている。また、本遺跡の 600 mほど西には、南北方向に延びる豊後街道があり、街道沿いには町屋も存在し賑わいをみせていた。(注10)

大政奉還後、明治６（1873）年に宮崎県が成立し、上別府村に県庁が建設されて以来、周辺域は急速に市街地化してゆき、さらに県庁前通りが整備されると通り沿いに宅地がみられるようになる。(注11)

本遺跡の所在地でもある宮崎地方裁判所は、明治９（1876）年、鹿児島裁判所管内に宮崎区裁判所として発足し、明治 23 年に現名称へと改称した。明治 28（1895）年には宮田町へ、昭和 29 年には別府町へと移庁する。そして、事務局及び宮崎家庭裁判所・宮崎簡易裁判所などが、昭和 37 年に旭２丁目の現庁舎に移り、現在に至っている。

注

（1） 昭和 14（1939）年段階での県指定の数であり、現在は前方後円墳３基と円墳８基が残る。また、丘陵下の宮崎神宮境内には、前方後円墳１基（舟塚古墳）が所在し、同一の首長系列とも考えられている。

（2） 同別符の候補地については、宮崎市大字瓜生野字渡付近もある。

（3）「渡別府村八幡宮」と記された明暦２（1656）年の棟札が存在することから、少なくとも江戸時代には確実に存在するが、その成立時期は定かではない。

（4）『図田帳』には、「前掃部頭（さきのかもんのかみ）」と表記される。

（5） 戸次頼時は、観応の擾乱時に反尊氏の足利直冬方に立ったため、その所領が没収された。

（6） 八条院国富荘の地頭や宇佐八幡宮領の弁済使として、『図田帳』に登場する土持信綱がいる。また、建武３（1336）年には、北朝方の土持宣栄が、南朝方の図師慈円が築城した宮崎城を攻め落とし、同城に入城している。

（7） 永正 10（1513）年の永弘重幸言上状（到津文書）に詳しい。

（8） 室町時代中ば頃に土持氏の手を離れた宮崎城は、伊東氏庶家の伊東県氏（門川氏）の所有するところであったが、文安３（1446）年に祐堯の手に落ち、家臣落合彦左衛門が城主として入城して以来、伊東 48 城のひとつとなった。

（9） 土持氏家臣、三須丹後守の居城と伝える丹後城が、蓮ヶ池横穴墓群と同一丘陵上に立地する。

(10) 江戸時代末期には、同村出身の杉田千蔭が、宮崎八幡神社境内に宮崎小学校の前身である私塾を開いている。

(11) 大正 13 年発行の宮崎市街地図には、今回の調査地は宅地として表現されており、宅地以外の周辺域については、水田か湿地が広がる風景であったと伝えられている。

参　考　文　献

木野義人・景山邦夫・奥村公男・遠藤秀典・福田理・横山勝三　1984 「宮崎地域の地質」『地域地質研究報告』地質調査所

竹内理三編　1986 『角川日本地名大辞典　45　宮崎県』株式会社角川書店

外山秀一　2006 「宮崎平野－大淀川下流域における古環境の復元－」『遺跡の環境復元』古今書店

野間重孝　1979 「中無田遺跡出土遺物」『宮崎考古』第５号　宮崎考古学会

宮崎県　1989 『宮崎県史　資料編　考古１』

1993 『宮崎県史　資料編　考古２』

1997 『宮崎県史　通史編　原始・古代１』

宮崎県教育委員会　1997 『池内横穴墓群発掘調査整理報告書』

1999 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』

宮崎県埋蔵文化財センター　2003 『山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 79 集

2006 『山崎上ノ原第２遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 130 集

2006 『別府町遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 137 集

宮崎市　1978 『宮崎市史』続編（下）

宮崎市教育委員会　1973 『石神遺跡」宮崎市文化財調査報告書第１集

1977 『下北方地下式横穴第５号』宮崎市文化財調査報告書第３集

1981 『浄土江遺跡』宮崎市文化財調査報告書第６集

1986 『浮ノ城遺跡』

1990 『宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅱ』

1991 「垣下遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』

1993 「浄土江遺跡Ⅱ」『宮崎市文化財調査報告書』

1996 『猿野遺跡・萩崎第２遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 30 集

1998 『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 33 集

1998 『京園遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 34 集

1999 『北中遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 38 集

1999 『下郷遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 41 集

2002 『北中遺跡Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書第 51 集

2002 『宮崎小学校遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 53 集

2003 『宮脇第２遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 55 集

2003 『北中遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書第 56 集

2004 『池開・江口遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 59 集

2005 『桜町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 60 集

柳沢一男　2003 「檍１号墳」『宮崎平野の古墳と古墳群』九州古墳時代研究会

有限会社平凡社地方資料センター編　1997 『宮崎県の地名』日本歴史地名体系第 46 巻　株式会社平凡社

第Ⅲ章　調査の結果

第１節　発掘調査区の層序（図４、図版２）

調査対象地の現状は、宮崎地方裁判所の既設建造物によって区画されたアスファルト敷きの駐車場として利用されており、現地表面の標高は、3.8 ～ 4.0 mを測る。

対象地は、裁判所設置に伴って、周辺道路面より高くかさ上げされており、旧地形上に造成土が厚く盛られていた。しかし、設置当初から建造物が存在しない場所であったため、基礎などによる撹乱は免れている。現地表下 0.8 ～ 1.2 mは、造成土であり、盛土された時期によって大きく２層に分割できる。造成土直下には、造成まで使用されていたと考えられる近代の耕作土が残る。そして、耕作土以下は、河川由来の水成堆積土壌か水田耕作土であり、５層以下については、埋没した自然流路の流域内であったことを確認した。また、自然流路が埋没する過程において、左岸側に微高地が形成されており、今回の調査区内だけでも、南北方向に約 0.6 mの高低差があることを確認した。

地層堆積状況の観察と記録は、調査区の西側壁で行い、０～ 19 層に区分した。

０層は厚さ 80 ～ 120cm の造成土で、盛土された時期よって上下層に分けられる。上層は、バラスや細礫などで構成された比較的新しい造成土で、現代のアスファルト及びコンクリート面も含む。下層は、細礫を多量に含む暗灰黄色極細粒砂主体で、昭和 37 年の裁判所設置に伴う造成土と考えられる。

１層は厚さ 45cm 未満の近代における盛土層である。層相は黒褐色極粗粒砂混極細粒砂で、最上部は土壌化が進行する。

２層は近代における作土層である。層相は非常に硬くしまる暗灰黄色極細粒砂質シルトで、層厚は 10cm 未満である。

３層は厚さ 10 ～ 25cm のシルト～極細粒砂で、近世の作土層と考えられる。粗砂の含有率によって３ａ・３ｂ層に細分した。３ａ層は調査区北半に分布する黄褐色極細粒砂で、層厚は 25cm 未満である。３ｂ層は厚さ 20cm 未満の極粗粒砂を含んだ暗灰黄色極細粒砂質シルトで、調査区全域に堆積する。盛土時の影響か、１層との境界部分は乱れている。

４層は自然流路埋没後の窪地に堆積した水成層で、調査区南半に分布する。弥生土器のほか磁器片を含む。４ａ～４ｃ層に細分した。４ａ層はオリーブ褐色極粗粒砂を含んだシルト混細粒砂の土壌化層で、層厚は５～ 10cm である。また、**SE202** の埋土の一部を構成する。４ｂ層は厚さ 15cm 未満でシルト混極細粒砂、４ｃ層は厚さ 10 ～ 20cm の暗灰黄色中～極細粒砂質シルトである。４ｂ・４ｃ層ともに、３cm 未満のシルトブロックを含有する。

５層以下は、埋没した自然流路の堆積土で、５～７層は、埋没の最終段階における静水堆積層である。

５層は厚さ 15cm 以下の黄灰色シルト混細～中粒砂である。層中にマンガン粒が散見する。

６層はシルト～極細砂主体で、粘性の有無で上下層に細分した。上層の６ａ層は厚さ 15cm 未満の灰褐色極細砂～シルトで、下層の６ｂ層は厚さ 15cm 未満の暗灰黄色粘土質シルトである。

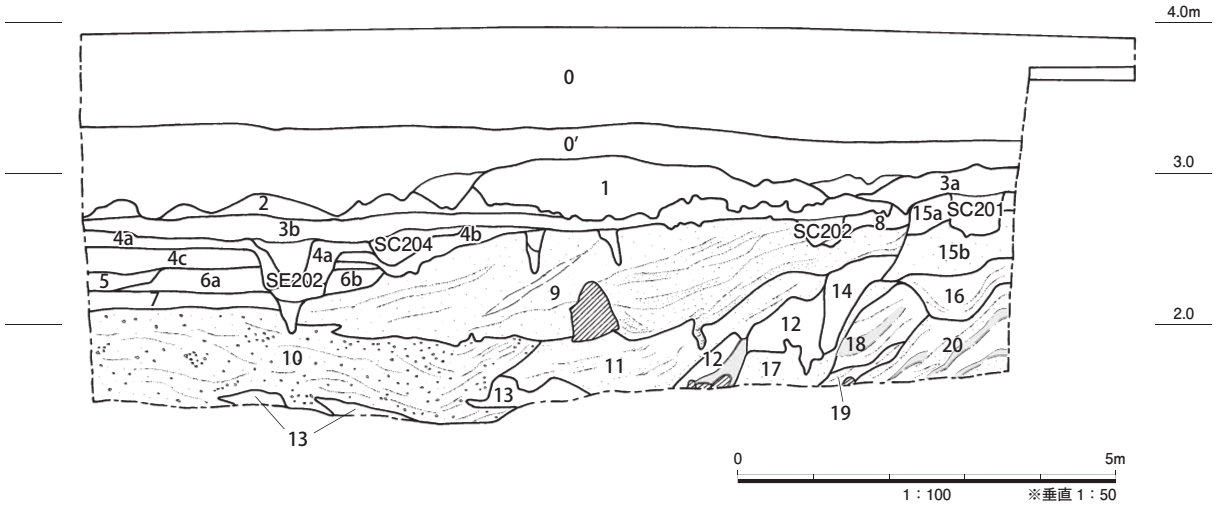


図４　西壁地層断面図

７層は厚さ 10 ～ 15cm の暗灰黄色極細粒砂質シルトである。

８層は灰黄色シルト混極細粒砂の土壌化層で、層厚は約 15cm である。

９層は厚さ 75cm 未満の暗灰黄色シルト混極細粒砂～中粒砂で、最上部は一部土壌化する。下部は粗粒化し、中粒砂または粘土質シルトの帯がラミナ状の堆積をなす。また、基底部で大型の自然木が集積する。

10 層は暗灰黄色中～極粗粒砂で、一部に細礫の集積があり、斜交ラミナが認められる。上半部はグライ化する。中位に酸化鉄が集積する影響もあってか、非常に硬くしまる。層厚は 65cm 以上である。

11 層は灰色シルト混中～粗粒砂と有機質が互層をなし、斜交ラミナも認められる。グライ化層である。層厚は 40cm 未満である。

12 層は灰色中粒砂質粘土質シルトのグライ化層で、基底部に植物遺体の堆積と自然木が認められた。層厚は 50cm 未満である。

13 層はオリーブ黒色細粒砂混粘土質シルトである。有機質を含むことでしまりがない。層厚は 20cm 以上である。

14 層は厚さ 55cm 未満の灰色中粒砂～極粗粒砂混粘土質シルトで、上部に細礫が多い。グライ化層である。

15 層は粒径の違いで上下層に細分した。上層の第 15 a 層は厚さ 10 ～ 20cm のシルト質極細粒砂で、上面の土壌化が著しい。下層の 15 b 層は厚さ 30 ～ 40cm の暗灰黄色シルト混細粒砂～中粒砂である。

16 層は厚さ 30cm 未満の細粒砂～中粒砂を含む灰色粘土質シルトである。斜交ラミナが認められ、自然河川と並行する水道とも考えられる。

17 層はオリーブ黒色シルト質中粒砂～極粗粒砂で、下半部の粒径は粗い。グライ化層で、層厚は 20cm 以上である。

18 層は厚さ 50cm 以上で、オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルトと植物遺体の層が互層に堆積するが、南側を 17 層によって分断される。基底付近に自然木を確認した。

19 層は中粒砂を含むオリーブ黒色粘土質シルト（植物遺体由来か）と灰色細～中粒砂が互層に堆積する。層厚は 60cm 以上である。

自然流路は、埋没の状況から３時期を想定し、18・19 層を１期、15 ～ 17 層を２期、８～ 14 層を３期とした。

第２節　弥生時代後期以前

１　遺構の分布（図５）

下層確認トレンチにおける断面観察の結果、東西方向に流れる自然流路を確認した。自然流路は規模を縮小させながら埋没しており、調査地内では１～３期を想定した。

流路の左岸を確認したことで、平面的な把握が可能であった自然流路３期について報告する。

２　検出遺構と出土遺物

ｉ）自然流路３期（図６・７、図版３・９）

調査区の西・南半域において確認した東西方向に流れる自然流路の左岸側であり、約 500 m南を流れる大淀川の一支流と考えられる。右岸側は調査区外におよぶ。流路の規模は、幅 11 m以上、深さ 1.3 m以上で、堆積土は、粘土質シルト主体の下層、中～極粗粒砂主体の中層、ラミナ状のシルトや中粒砂の薄い堆積を有する極細～中粒砂主体の上層に概ね区分できる。流路機能時の一時期に、川底であった基本層序９層および 12 層の基底部には自然木が集積する。出土遺物は、基本層序９・10 層を中心として弥生時代中期の前半期に属する土器群が出土したほか、９層では弥生土器**１**に復元できる土器片が、自然木（放射性炭素年代測定 No. ２）の近くでまとまって出土した。

自然流路３期が機能していた時期については、流路内出土の土器や包含層を含めた遺物の出土状況、さらに周辺遺跡の様相をもって、弥生時代中期を安定期と想定し、後期の前半期には埋没したと考える。

１～７は弥生土器で、**２～６**は甕、**１・７**は壺である。**１**は広口壺の口頸部である。外面はハケ調整の後、丁寧なナデを施して成形し、内部上半は横方向、下半は斜め方向のハケで調整する。**２・４**は

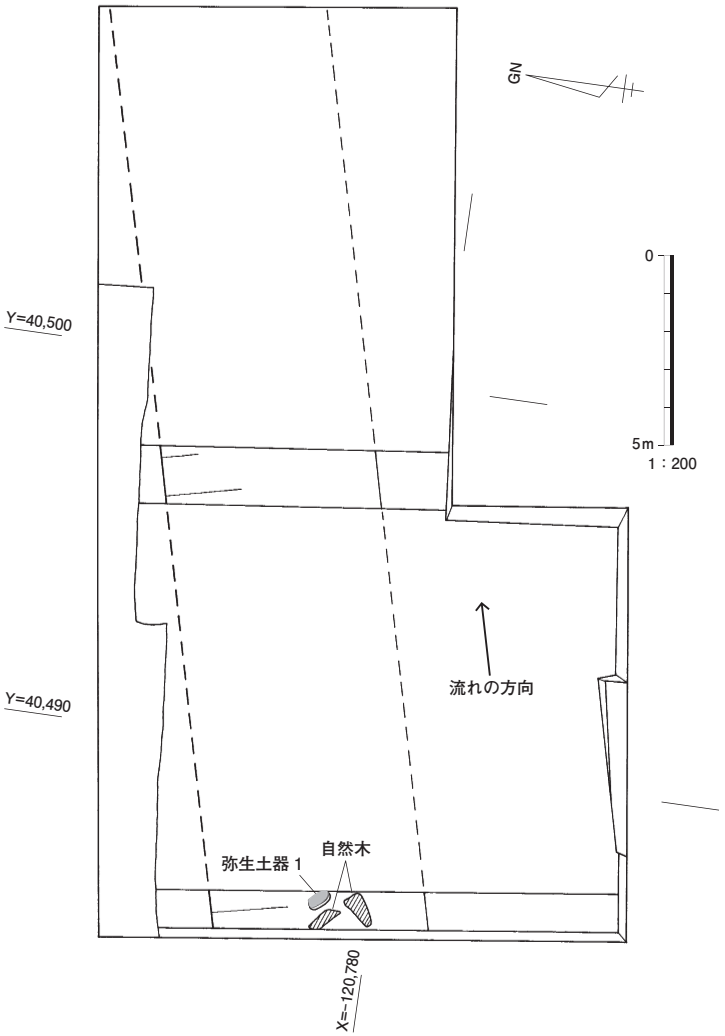


図５　自然流路３期の平面図

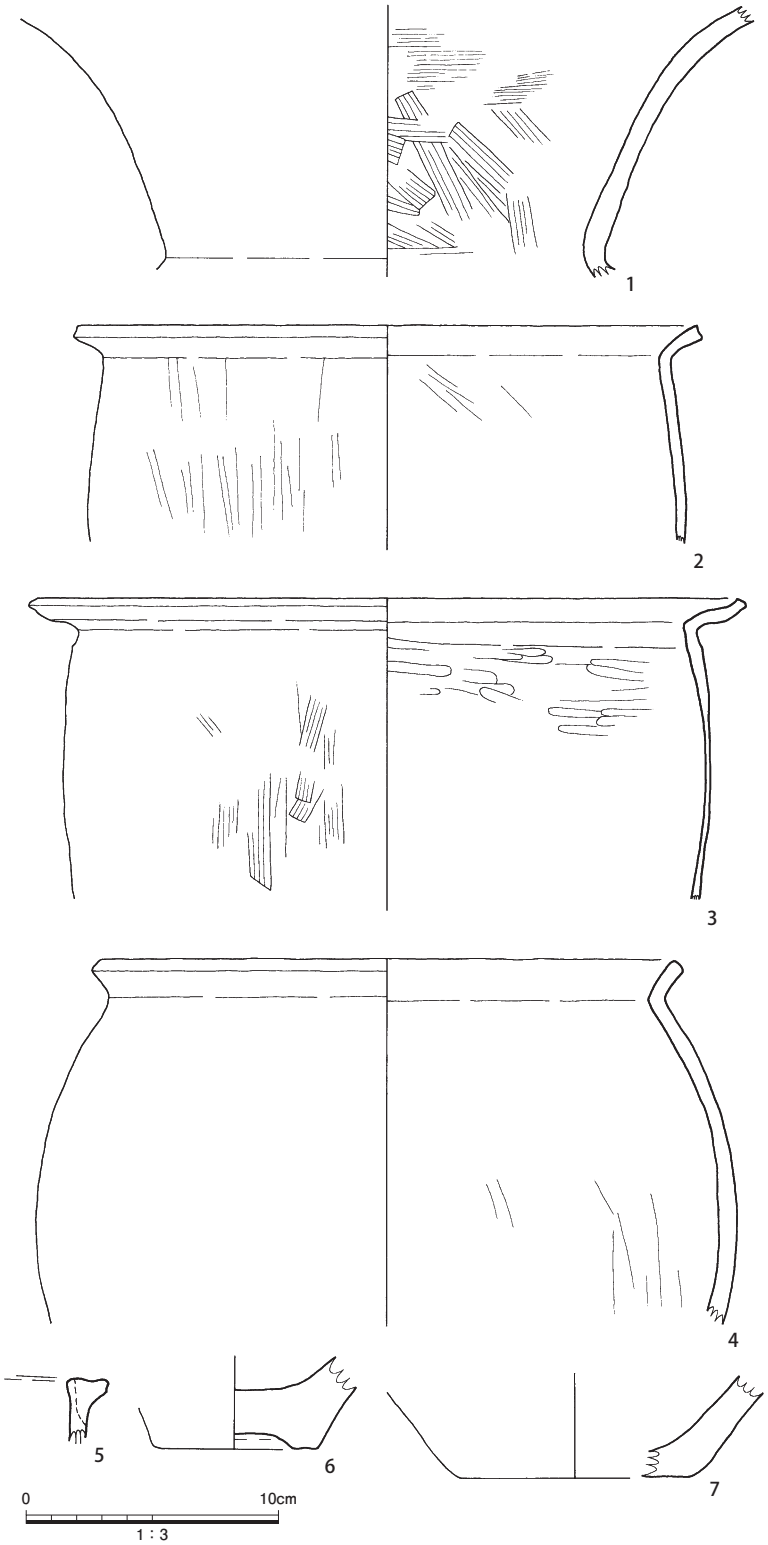


図６　自然流路３期出土の弥生土器
９層（１・４）、10層（２・３・５～７）

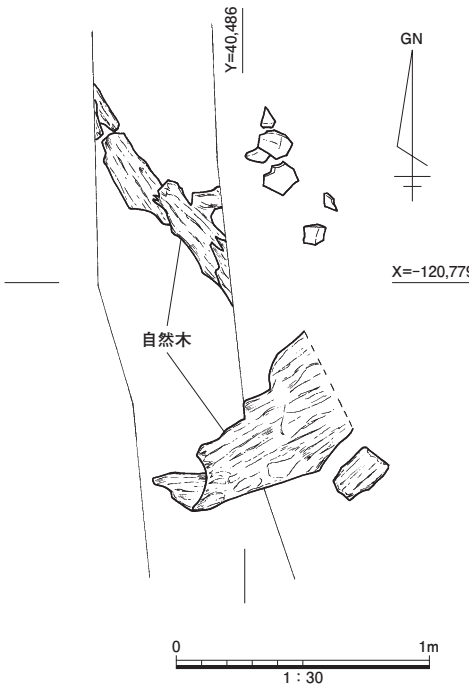


図７　弥生土器１の出土状況図

口縁部がやや短く「く」の字に屈曲する甕で、端部は面をなす。ともに内湾する体部をもつが、**2**については体部の張りは小さく、器壁も薄い。**2**の体部外面は、縦方向のハケで調整し、**4**はミガキが確認できた。内面はともにナデで調整する。**3**は強く「く」の字に屈曲する口縁部をもち、内面の屈曲部は明瞭な稜をなす。口縁端部は上下からの強い横方向のナデによって面を形成する。体部外面は縦方向のハケで調整するが、上位を横方向のナデで磨り消す。体部内面は上半部に横方向のミガキが確認できる。器壁は薄く、胎土は緻密である。**5**は内湾する口縁部に、逆「Ｌ」字をなすように断面三角形の端部を貼り付けるものである。端面に凹線がめぐる。**6**は底部裏面の中央部が窪んで輪状となる底部で、**7**は平底をなす壺の底部である。

なお、西壁の流路堆積土中に包含されていた自然木および草本について、AMS法による放射性炭素年代測定を行った結果、1期中位で2170±20年BP（BC360～160）、1期下位で2235±25年BP（BC390～340、320～200）、３期で2270±20年BP（BC400～350、300～230）という年代値が得られた（第Ⅳ章参照）。

第３節　中世～近世（第２面）

１　遺構の分布（図８・12、図版４・７）

基本層序３・４層の除去後に検出した中世から近世にかけての生活面である。微地形としては、自然流路が完全に埋没した後、流路北岸に微高地が形成され、調査区内においても南北方向に最高約 0.6 m の高低差が生じている。検出した遺構には、調査区北半部の微高地上に掘立柱建物を構成する柱穴群や門、井戸、土坑などが分布して屋敷地を形成し、その南側には、屋敷地を取り囲んでいたと考えられる、くい違う２条の東西方向の区画溝を設けている。調査区の中ほどには、南側に大きく落ち込む段差があり、区画溝の１条は下段側に設置されている。また、下段区画溝の東側には、屋敷地への入り口部が設けられており、溝の南側で土坑などを検出した。

なお、上記の調査区中ほどの段差をもって、北半部と南半部に呼び分ける。

２　検出遺構と出土遺物

ｉ）掘立柱建物

ＳＢ２０１（図９・15、写真２、図版５・９）　北半部中央で検出した桁行４間（7.8 m）、梁行１間以上（2.5 m以上）の東西棟の掘立柱建物で、東側に 1.0 m程度突出する庇を設ける。棟の方位は N80° E を示す。桁行の柱間は 1.7 ～ 2.2 mとやや不揃いで、梁行では 2.5 mを測る。建物南辺の柱穴は、長軸 0.5 ～ 0.8 mの方形状か長方形状の掘形をなし、深さは 0.3 m程度であったが、**SH246** のみが 0.5 mほどの深さをもつ。これらのうち、確認できた柱痕の直径は 0.1 ～ 0.2 mを測る。遺物は、**SH246** の最上位層から石臼 **25** が倒位で出土した。石臼以外に同柱穴からは軽石製品 **24** を確認した。その他、別柱穴から弥生土器片や土師器小皿などが出土した。このうち、**SH268** 出土の弥生土器甕 **10** のみを図化したが、下位自然河川から巻き上げられたものである。

写真３　SH246と石臼25の出土状況（南から）

10 は弥生土器甕の底部で、縁辺を拡張させて上げ底とする。外面の調整は、縦方向のミガキを施す。**24** は扁平な楕円形に成形された軽石製品である。重量は 34.9 g である。**25** は石臼の上臼で、石材は凝灰岩製である。直径約 30cm に復元できる。

ii）門

門２０１（図 10）　北半部西側で検出した主柱２本と両脇の控柱２本ずつで構成される冠木門である。主軸は **SE202** と同じで、ほぼ東西方向をとる。主柱間の距離は 2.2 mを測り、主柱とすぐ脇の控柱の距離は 0.6 ～ 0.7 m、控柱間は 1.0 ～ 1.1 mとなる。主柱の掘形は不揃いで、底部までの深さも 0.22 mと 0.35 mで一定ではない。遺物は **SH274** と **SH281** から軽石片が出土したが、その他に時期を示す資料はなかった。なお、最東側の控柱穴の底において、礎石になるものか 15cm 角の礫を検出した。

その他、北半部では **SB201** と門 **201** を構成する柱穴の他に、60 基余りの柱穴および小穴を検出したが、建造物を復元するに至らなかった。以下には、柱穴および小穴出土の遺物で図化できた３点を報告する。

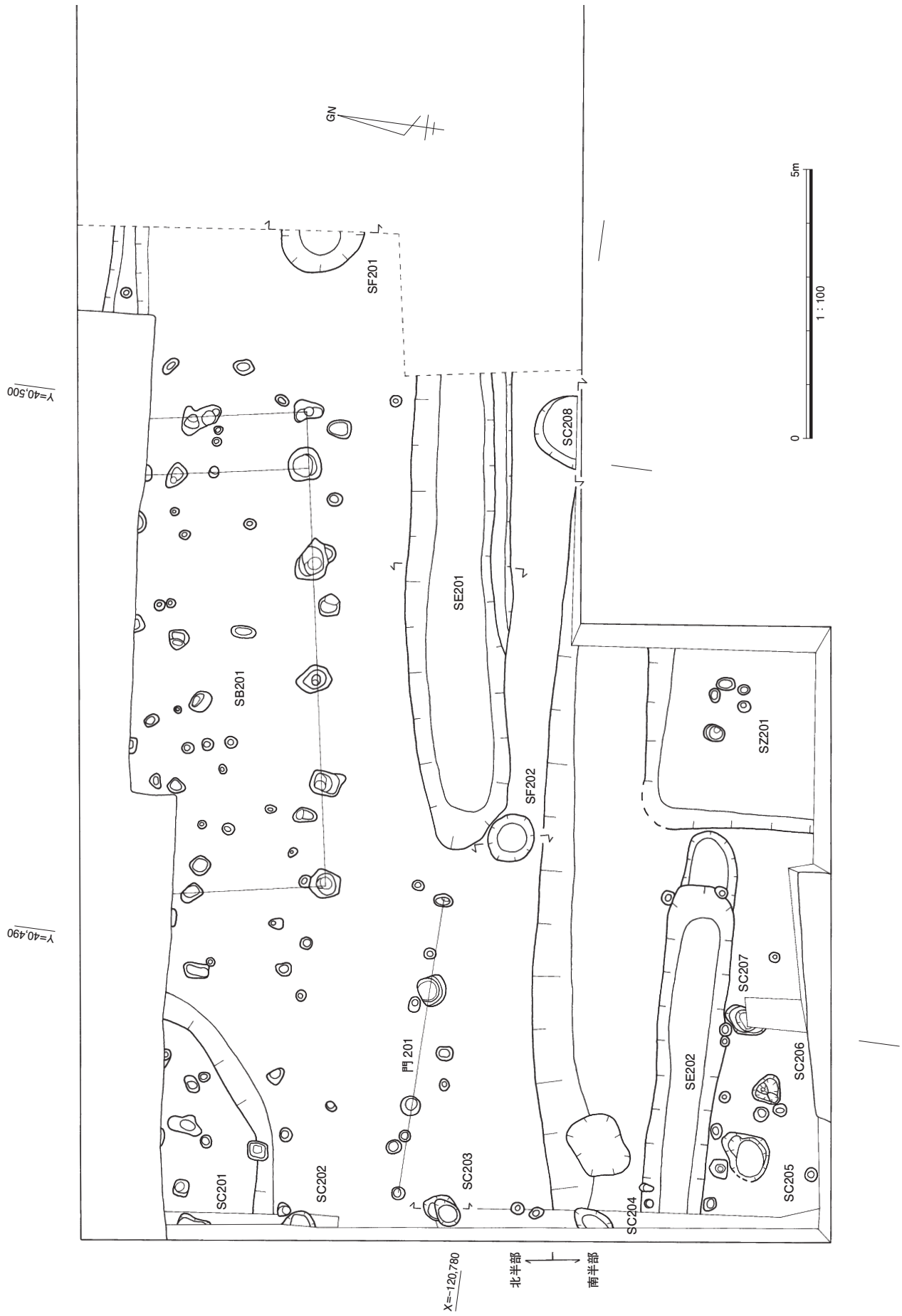


図８　中世～近世の遺構平面図

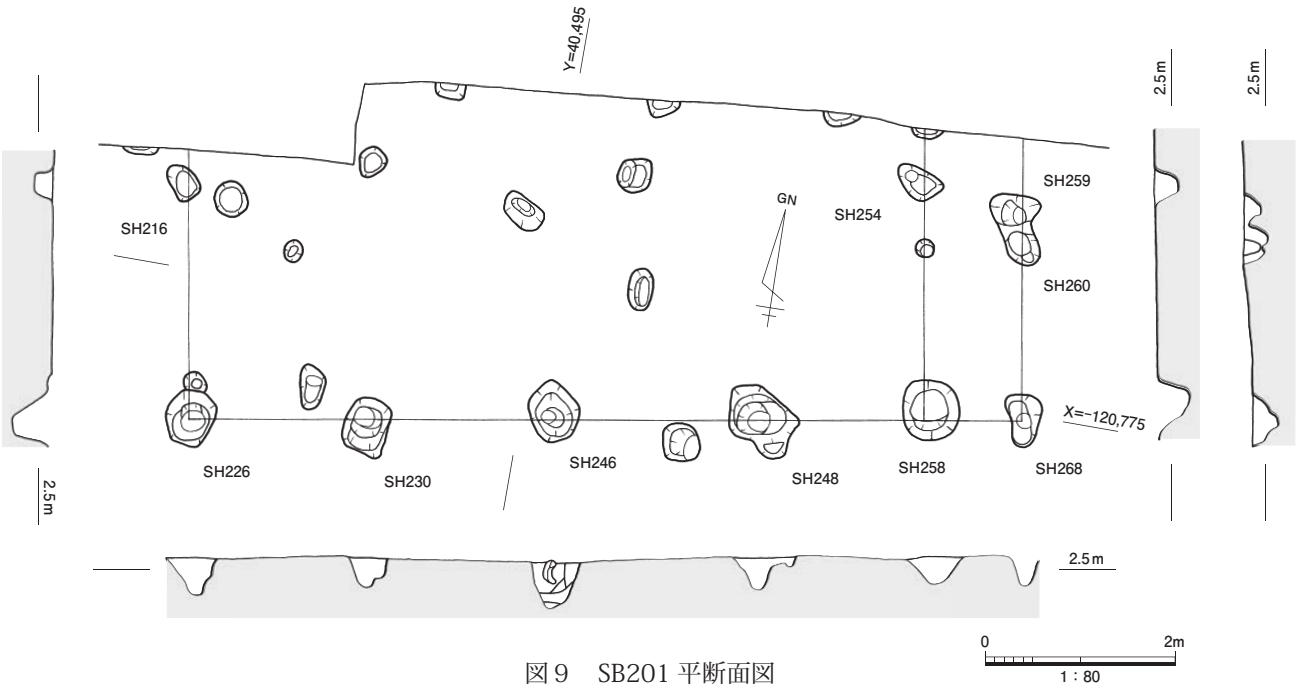


図９　SB201 平断面図

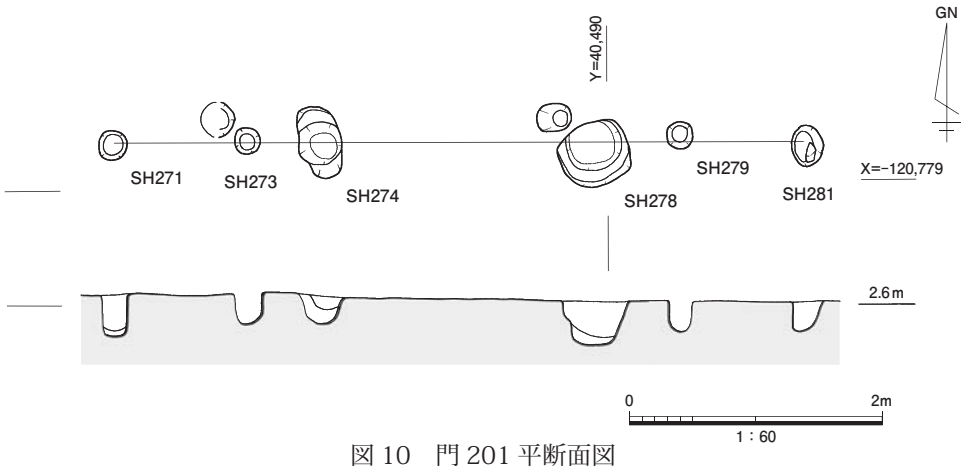


図 10　門 201 平断面図

16 は **SH207** 出土の白磁小坏である（写真３）。体部下半が張り、口縁部にかけて緩やかに外反する。器壁は薄く、畳付の釉を削り取った細く低い高台が付く。見込みの釉を輪状に削る。森田分類のＥ類に相当するもので、16 世紀代を考える。(注1) **19** は **SH263** 出土の土師器小皿である。坏部の器壁は厚い。また、突出する底部には糸切りの痕跡が確認できる。**23** は **SH247** 出土の完存する土錘である。重量は 6.2 ｇである。

写真４　SH207 と白磁小坏 16 の出土状況（東から）

ⅲ）井戸

ＳＦ２０１（図 11、図版６）　北半部東側で検出した、擂鉢状に掘削された素掘りの井戸である。東半分は調査区内に設けた排土の仮置き部分に掛かるが、平面形は直径約 1.5 ｍの円形をなすと推測される。深さは 1.4 ｍを測り、最深部において湧水する。埋土は上下層に分けられ、下層がシルトを含む粗粒砂～細礫、上層が粘土質シルトを含む中粒砂～細礫で構成される。上下層ともに 0.1 ｍ前後の粘土質シルト～極細粒砂主体のブロックを有する。

井戸の帰属時期は、第２面の構築層より上位層である基本層序３ｂ層上面が遺構構築面であることか

ら、屋敷地廃絶後の近世後半期を想定する。遺物は下位自然河川から巻き上げられた弥生土器片の他に、軽石塊が出土した。

ＳＦ２０２（図 11・15、図版６・10）　北半中央で検出した、**SE201** の西側に隣接する素掘りの井戸である。平面形は直径 0.9 mの円形で、ほぼ直立に掘削される。深さは 1.45 mを測り、最深部で湧水する。埋土は大別して５層に細分でき、最下層は粘土質シルトを含む中～極粗粒砂で、上位層はブロック状の粘土質シルトや極細粒砂などで構成され、廃絶時に一気に埋め戻された様子が確認できた。遺物は弥生土器片、陶器片、土師器小皿片などが出土したが、このうち弥生土器甕８を図化した。

８は下城式系の甕である。外傾して面をなす口縁端部をもち、直立する口縁部の上位に、断面三角形の突帯を２条貼り付ける。下位自然河川から巻き上げられたものである。

iv）土坑

ＳＣ２０１（図４）　北半部北西端の微高地上で検出した土坑である。西半分は調査区外におよぶ。規模は南北幅 0.6 m、深さ 0.3 mを測り、断面形状を方形になるように掘削する。埋土はシルト混極細粒砂の単一層であった。遺物は出土していない。

ＳＣ２０２（図４）　北半部西側で北西端の微高地下で検出した、方形に近い平面形が考えられる土坑である。西半分は調査区外におよぶ。規模は南北幅 0.6 m、深さ 0.2 mを測り、埋土は上下層に分けられ、下層が粘土質シルト、上層がシルト～極細粒砂であった。出土遺物はない。

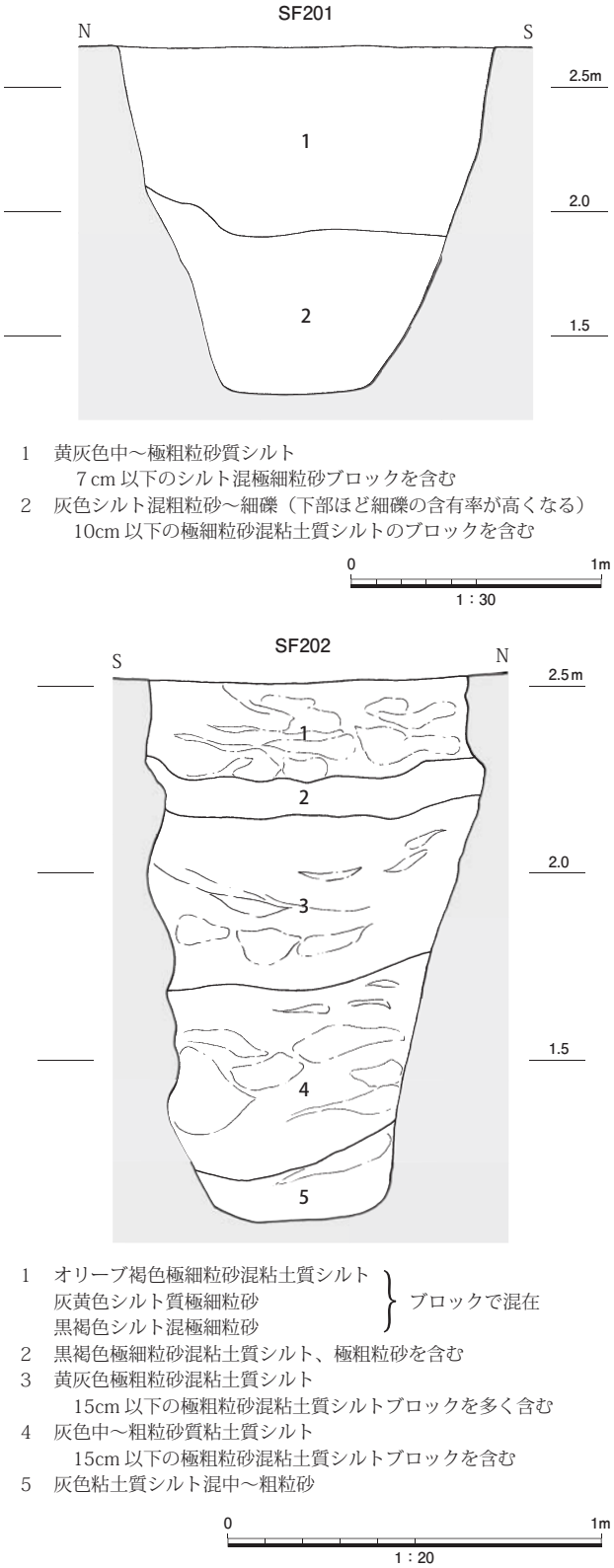


図 11　SF201・202 断面図

ＳＣ２０３（図 13）　北半部西側で検出した、東側に段を設けた土坑である。規模は長軸 0.6 m、短軸 0.5 mで、深さは 0.4 mを測る。埋土はシルト質細粒砂を主体とし、極細粒砂質シルトのブロックを含む下位層を区分した。遺物は出土しなかった。

ＳＣ２０４（図４）　南半部西側で検出した土坑で、西半分は調査区外におよぶ。規模は南北幅 0.8 m、深さ 0.25 mを測り、埋土は暗灰黄色シルト混細粒砂の単一層であった。**SE202** など南半部の遺構群が埋没した後に、基本層序４層上面を構築面とすることから、遺構の帰属時期を近世後半期に想定する。

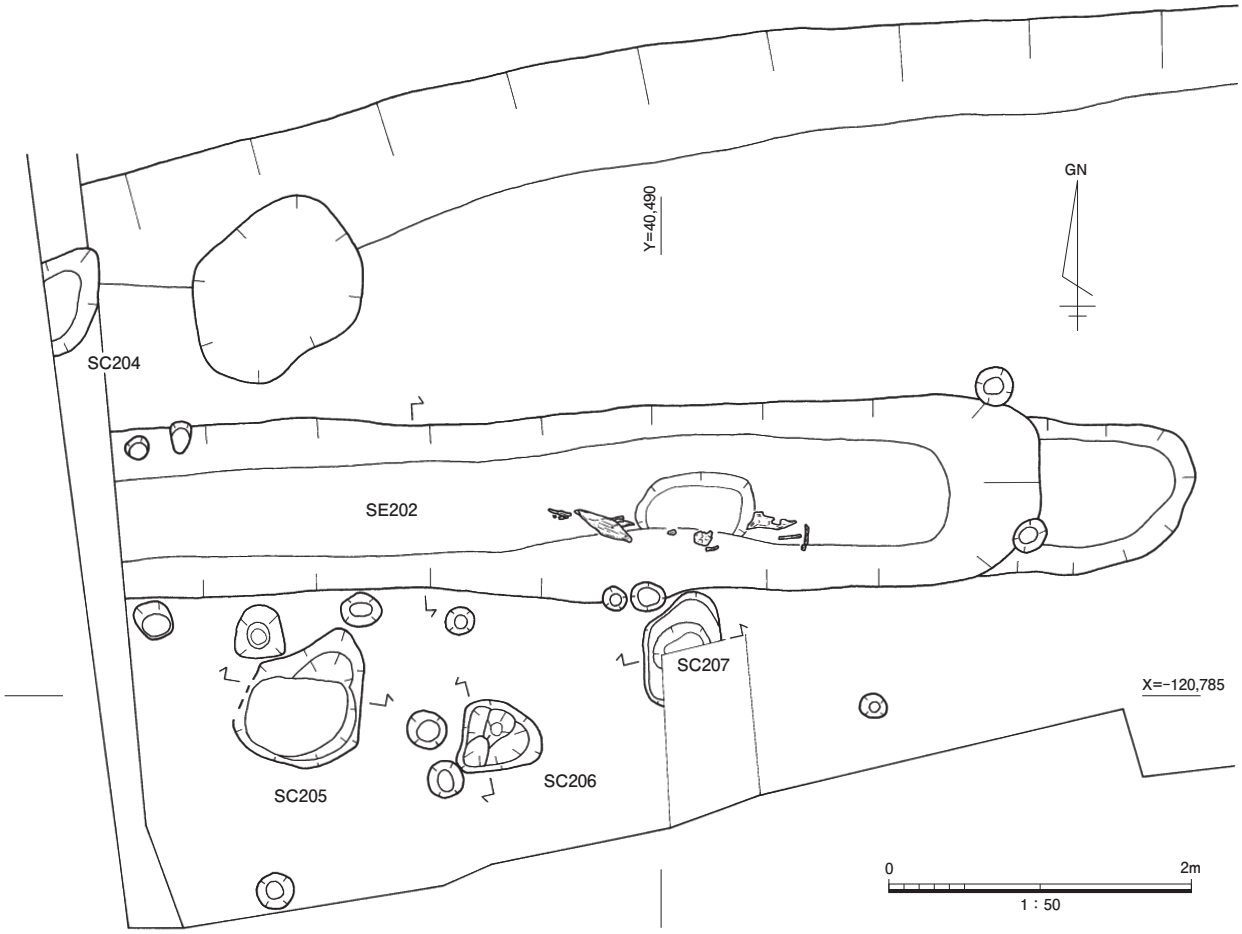


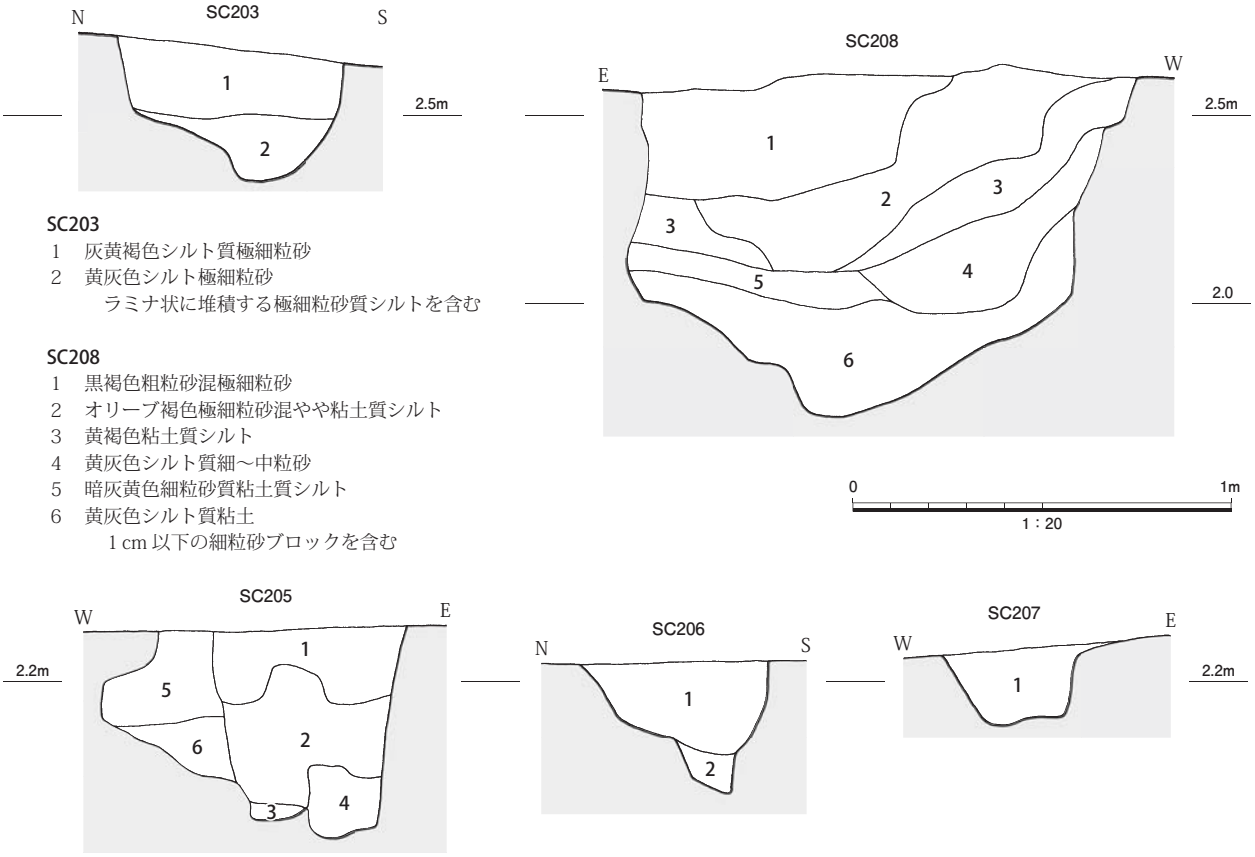
図 12　南半部の遺構平面図

遺物は出土していない。

ＳＣ２０５（図 13・15、図版 7・10）　南半部西側で検出した、**SE202** より南側に位置する土坑である。平面形は北側に浅い突出部をもつ楕円形で、突出部を除いた規模は長軸 1.0 m、短軸 0.8 mを測る。西側を袋状に掘り込み、底部まで傾斜をもって掘削する。深さは 0.55 mであった。埋土は西側の袋状の部分と東側とで区分できる。袋状の部分は下層にシルト質細粒砂、上層に粘土質シルトが堆積し、東側は最下部に細礫層があり、上位層は粘土質シルトを主体とする。底部の一部が窪む断面形状や埋土の堆積状況から、柱あるいは板材などを樹立させるための掘形であったと考える。遺物は土師器皿 **18** が出土した。糸切りによって底部切り離しを行うものである。

ＳＣ２０６（図 13、図版 7）　南半部西側で検出した、方形に近い平面形の土坑である。**SE202** より南側に位置する。規模は長軸 0.6 m、短軸 0.5 mで、楕円状に深く掘り下げられた北西部分の深さは 0.35 mを測る。埋土は深く掘られた部分に粗粒砂質シルトが堆積し、上位層はシルト質細粒砂であった。断面形状から柱の掘形である可能性が考えられるが、ここでは土坑として取り扱った。遺物の出土はない。

ＳＣ２０７（図 13）　南半部中央で検出した土坑で、**SE202** の南側に隣接する。土坑南半分は試掘坑によって削平されるが、楕円形の平面形をなすことがわかる。規模は長軸 0.75 m、短軸 0. 5 mを測り、深さは 0.2 mであった。埋土は極細～細粒砂主体の単一層であった。遺物は出土していない。



SC203
1　灰黄褐色シルト質極細粒砂
2　黄灰色シルト極細粒砂
　ラミナ状に堆積する極細粒砂質シルトを含む

SC208
1　黒褐色粗粒砂混極細粒砂
2　オリーブ褐色極細粒砂混やや粘土質シルト
3　黄褐色粘土質シルト
4　黄灰色シルト質細～中粒砂
5　暗灰黄色細粒砂質粘土質シルト
6　黄灰色シルト質粘土
　1 cm 以下の細粒砂ブロックを含む

SC205
1　暗灰黄色極細粒砂混やや粘土質シルト
　2 cm 以下のシルト質極細粒砂ブロックを含む
2　オリーブ褐色極細粒砂混粘土質シルト
3　灰オリーブ色シルト質粗粒砂
4　黄灰色細礫、2 cm 以下の細粒砂質シルトブロックを含む
5　黄灰色極細粒砂混粘土質シルト
　ラミナ状に堆積する極細粒砂質シルトを含む
6　暗灰黄色シルト質細粒砂

SC206
1　黄灰色シルト混細粒砂、粗粒砂を含む
2　灰オリーブ色シルト質粗粒砂

SC207
1　暗灰黄色粗粒砂混極細～細粒砂
　3 cm 以下のシルト混極細粒砂ブロックを含む

図 13　SC203・205 ～ 206 断面図

ＳＣ２０８（図 13、写真 4、図版 6）　北半部南東側で検出した土坑である。南半分は調査区外におよぶが、直径 1.3 m の円形の平面形が想定できる。壁面を垂直に掘削し、底面を扁平な円錐状に整える。深さは 0.9 m で、下位自然河川の細礫層まで掘削されるが、湧水はなかった。埋土は最下層にシルト質粘土が厚く堆積し、上位層は粘土質シルトが主体となって西側から流れ込んで堆積する。なお、遺構の性格として、湧水をみないが井戸、あるいは便所などの可能性を考えて、珪藻分析や寄生虫卵分析などを行った結果、どちらの可能性も低いことが判明した。しかし、埋土 1 において、稲の植物珪酸体密度が非常に高いという結果が得られ、何らかの形で稲藁を利用したと推定されている（第Ⅳ章参照）。埋土 1 については、土坑検出時に半円形の平面形を確認しており、埋土の堆積状況から、桶状のものが据えられていた可能性もある。遺物は弥生土器片が出土したが、下位自然河川からの巻き上げであり、遺構の帰属時期を示すものではない。

写真 5　SC208 検出時（北から）

ｖ）溝

ＳＥ２０１（図 14・15、図版 5・10）　北半部中央で検出した、

北半の建物群の南側を区画する東西方向の溝である。SB201の南約1.5ｍに位置し、主軸の方位を同じくする。溝の西側はやや緩やかに終息し、溝の先端南側にSF202が近接する。規模は、長さ８ｍ以上、幅2.0ｍ、深さ0.35ｍを測る。埋土は、粘土質シルト～細粒砂を主体に３層に細分できる。遺物は弥生土器片、輸入・国産磁器片、土師器小皿片などが出土した。

13は白磁皿である。細い高台を有し、畳付の釉は外面側から削り取られ面をなす。森田分類のＥ－２類に属し、16世紀代に位置付けられる。20は土師質土錘である。残存する重量は2.5ｇである。

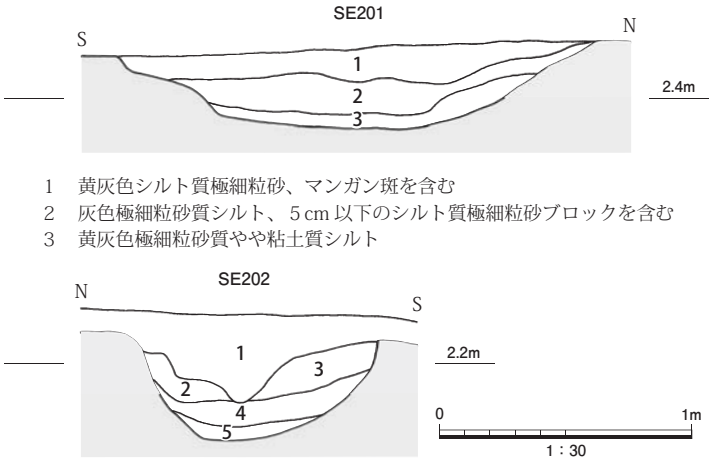


図14　SE201・202断面図

なお、溝埋土の中位付近で出土した炭化木片について、AMS法による放射性炭素年代測定を行った結果、385±20年BP（AD1440～1530、1590～1620）という年代値が得られ、出土遺物の年代ともほぼ合致する（第Ⅳ章参照）。

ＳＥ２０２（図14・15、図版７・10）　南半部西側で検出した、北半部の建物群の南側を区画する東西方向の溝で、門201と方位を同じくする。やや深めに掘削された溝の東側はやや角度をもって終息し、溝先端には溝状の浅い窪みが取り付く。規模は、長さ６ｍ以上、幅0.9～1.3ｍで、下位の自然河川まで掘り込んだ最深部は0.45ｍを測る。溝の埋土は、大別して４層に細分でき、下層は粗粒砂～細礫、中層は細粒砂混シルト、上層はシルト～細粒砂で、最上層は基本層序４ａ層が流入する。遺物は弥生土器片、輸入・国産陶磁器片、土師器小皿片などが出土した。

9は弥生土器甕である。内面に鈍い稜をもって外反する口縁部をもち、さらに端部を外方に折り返す。体部内面は横方向のミガキで成形する。14は白磁小坏である。内外面に黄白色の釉を施す。15は白磁の皿である。やや強めに外反する口縁部をもち、端部を丸くおさめる。大宰府分類の皿Ⅲ類に属し、12世紀中頃に位置付けられる。17は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。台形状に削り出された低い高台をもつ。現状では体部内面のみに暗褐色の釉が確認できる。17世紀代の所産である。

なお、溝の底において検出した杭状の炭化木片について、放射性炭素年代測定を行った結果、2225±20年BP（BC380～200）という年代値が得られたが、出土遺物との整合性は取れなかった。溝の周囲には、杭が打ち込まれた痕跡がいくらか残っているため、当初、出土の炭化材を杭の一部と考えていたが、分析結果から下位層における弥生時代の自然河川に含まれたものと判断する（第Ⅳ章参照）。

ⅵ）入口部

ＳＺ２０１（写真５、図版10）　南半部東側で検出した、深さ0.15ｍ程度の浅い落ち込みである。南側と東側は調査区外におよぶ。西辺はSE202の浅い窪みと接し、北辺が平行することから、同溝とは一連の遺構とした。SE202が屋敷地の区画溝であることを踏まえ、SZ201の機能を屋敷地内への入口部と

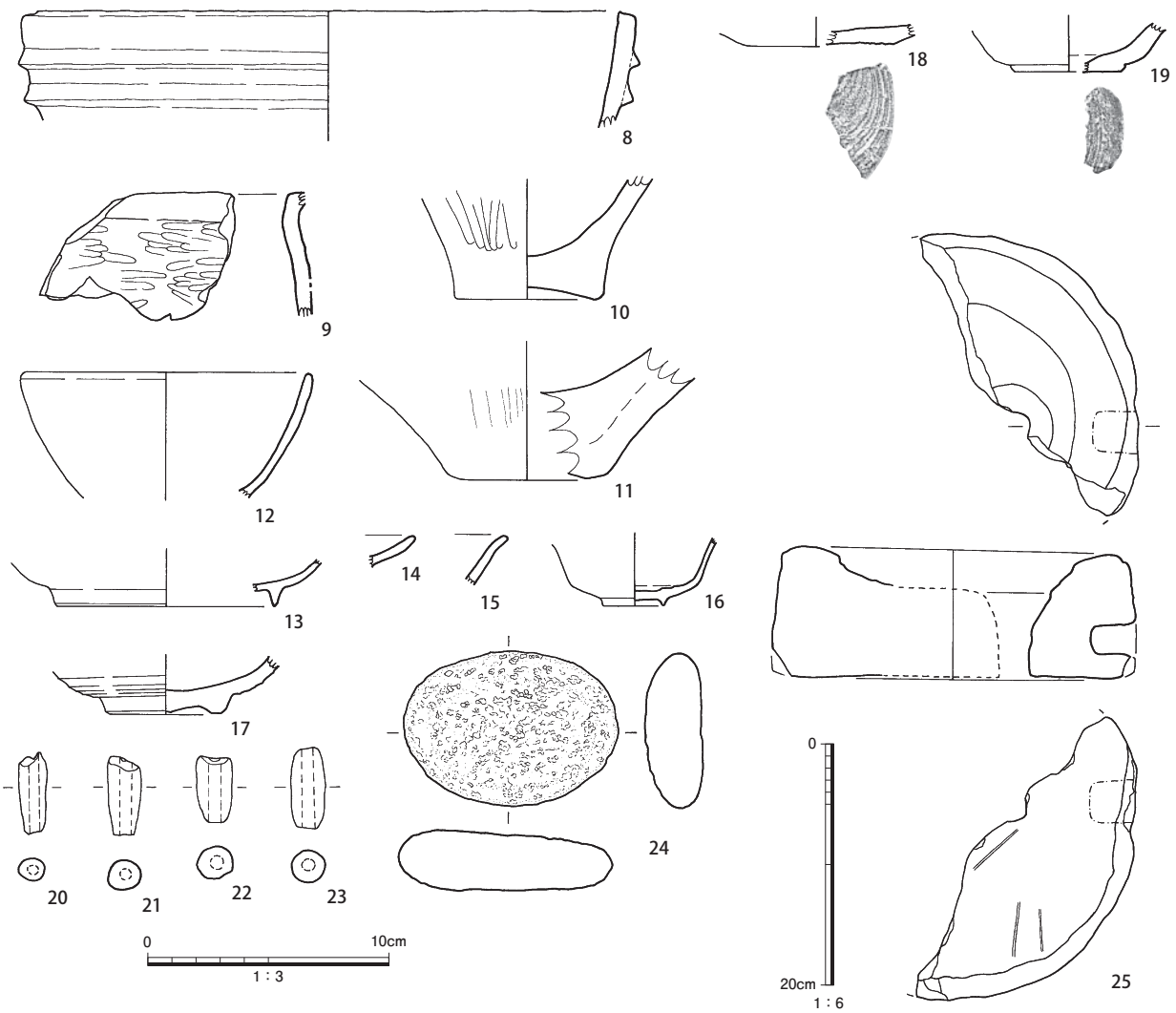


図 15　中世～近世の遺構出土の遺物

SH207（16）、SH246（24・25）、SH247（23）、SH263（19）、SH268（10）、SF202（8）
SC205（18）、SE201（13・20）、SE202（9・14・15・17）、SZ201（11・12・22）

写真６　SZ201 検出状況(北西から)

考えたい。なお、落ち込み内には、５基の小穴が密集していたが、建造物などは復元できなかった。遺物は弥生土器片、青磁片、青花片、陶器片などが出土した。**11** は弥生土器で、やや上げ底をなす壺の底部である。**12** は青磁碗である。内湾する体部をもち、口縁端部は内面側につまみ上げられる。外面体部下半に露胎部が認められる。14 世紀末～ 15 世紀前半の所産である。**22** は土師質土錘である。残存する重量は 5.5 g である。

第４節　近代（第１面）

1　遺構の分布（図 16、図版８）

造成土である基本層序０層下で、畑作にともなう畝群と畝間の溝群を検出した。これら畝群と畝間溝群は、調査区全域に分布するが、調査区北西端から西端にかけては、自然堆積による微高地（基本層序

３ａ層）と人工的な盛土（基本層序１層）が存在する。また、調査区最北端は、畑地より最大で 0.3 m ほど高くなり、調査区外におよぶ北側の土地については、居住地など畑地とは別用途で利用がなされていたと考える。

調査区周辺は、昭和 37 年の裁判所設置に伴って一気に土地のかさ上げがなされている。この際の造成土（基本層序０層）は、畝間溝の埋土としても確認ができ、このことは、調査区が土地造成の直前まで畑地として利用されていたことを示している。

２　検出遺構と出土遺物

畝群・畝間溝群（図 17、写真６、図版８・10）　調査区全域で、東西方向に直線で延びる畝８条と畝間の溝９条を検出した。畝の規模は、最大で幅 0.9 m、高さ 0.15 mを測り、畝間溝の幅は最大で 1.2 mである。なお、北側５条の畝は西側を終息させており、調査区西側の微高地および盛土との間に排水のための溝を設けている。**畝間溝群**の埋土内から、弥生土器片、土師器片、輸入・国産陶磁器片、瓦片などが出土した。その中でも、べっ甲製の髪留め **42** については、溝の底部に張り付いた状態で出土し、**畝群**機能時の遺物と考えられる。以下に、畝間溝内出土の遺物を一括して報告する。

26 ～ **29** は弥生土器である。**26**・**27** は下城式系の甕である。**26** は直立して開く口縁部の下半付近に、刻みを有する突帯を１条貼り付ける。体部内面を斜め方向のハケで調整する。**27** は内湾気味に直立する口縁部の端部直下に、断面三角形の低い突帯を貼り付ける。**28** は甕の底部で、貼り付けによる高台状の

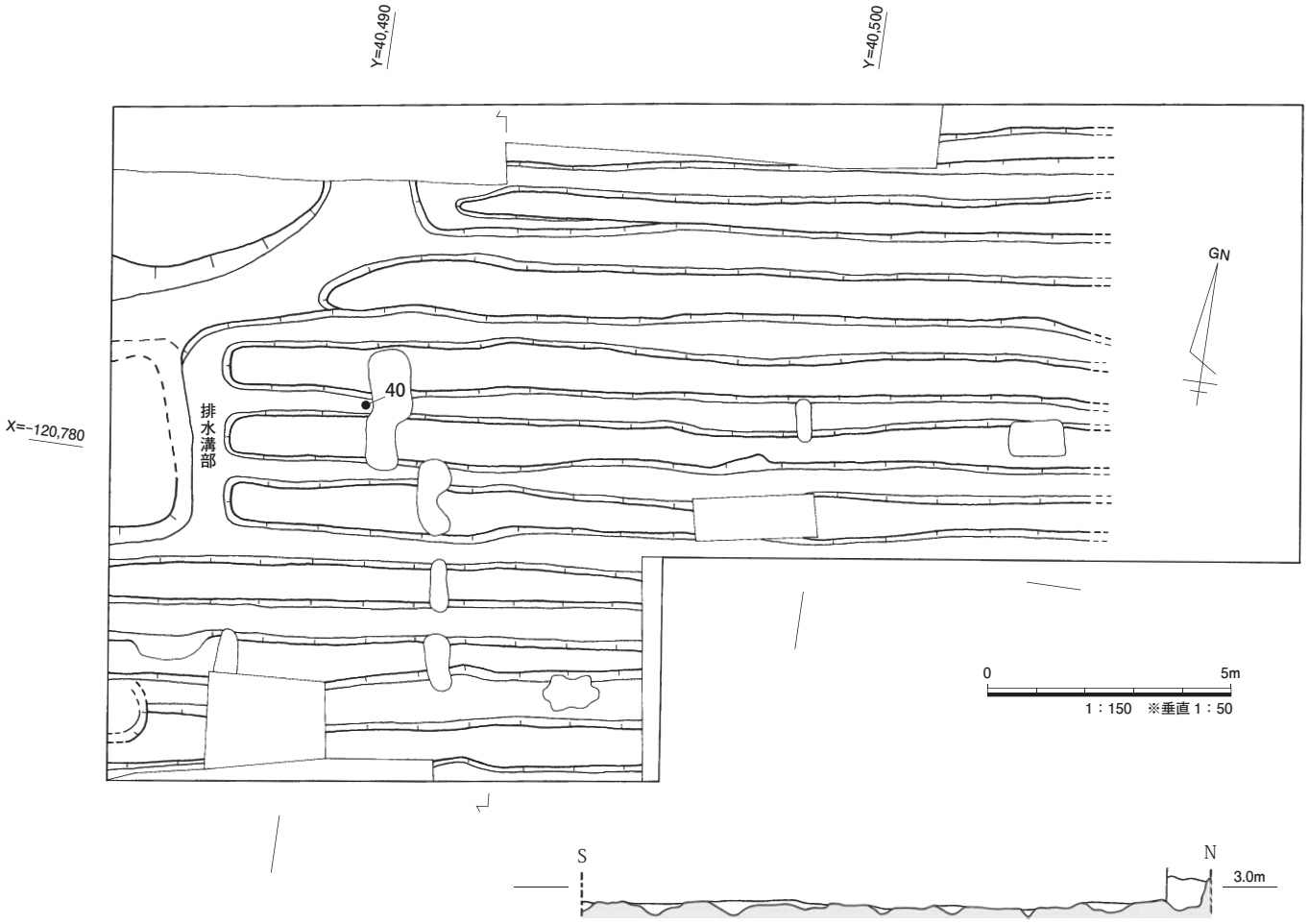


図 16　近代の遺構平面図

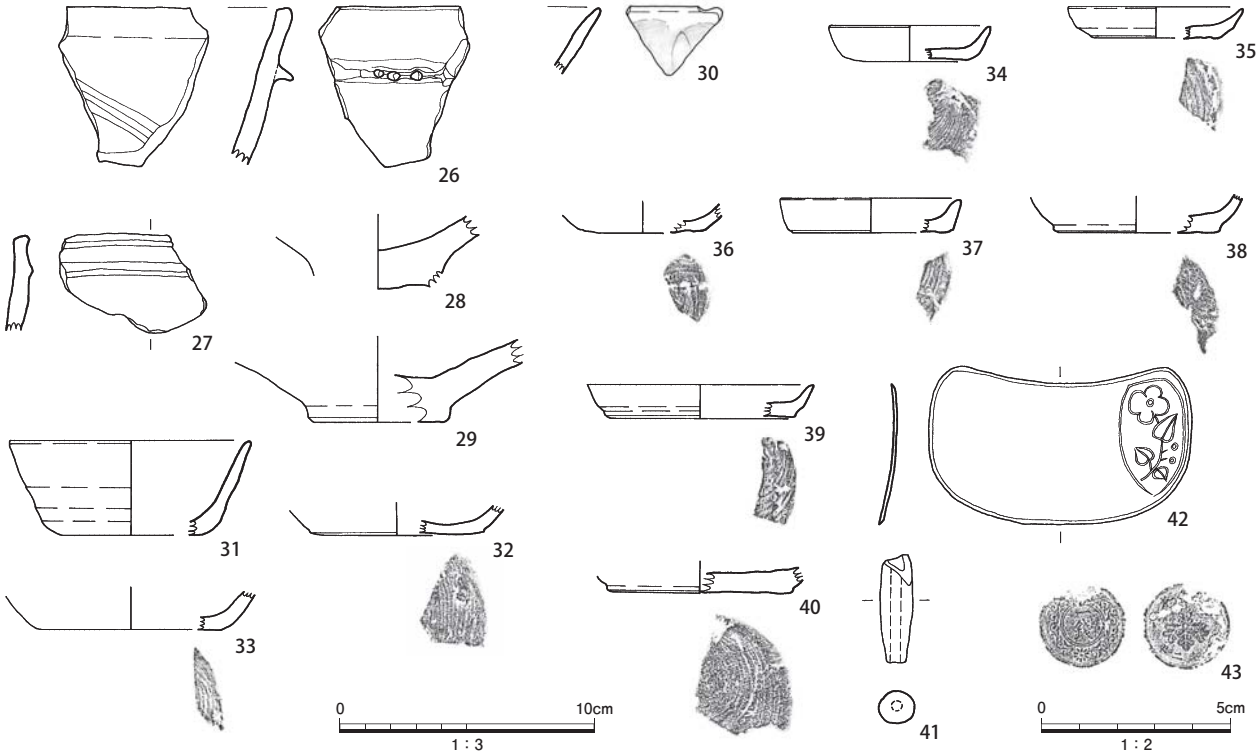


図 17　畝間溝群出土の遺物

写真 7　髪留め 42 の出土状況（西から）

突出を有するものである。**29** は平底になる壺の底部で、体部は外方に大きく開く。**30** は龍泉窯系の青磁碗である。口縁部がやや外反するもので、体部外面に鎬蓮弁を施す。14 世紀代の所産か。**31** ～ **33** は土師器坏である。**31** の底部と体部の境は丸みを帯び、直線的に開く体部をなす。口縁端部はつまみ上げるように横方向のナデを施して鋭く仕上げる。**32**・**33** の底部の切り離しは糸切りで、やや浅めの坏部をなすものと考えられる。**34** ～ **40** は土師器小皿である。**37** 以外は体部がやや内湾気味に外方に開くもので、**38** ～ **40** は底部と体部の境に段を設ける。**37** は厚みのある器壁を有し、体部はやや外方に直線的に延びる。すべて糸切りによって底部の切り離しを行う。**41** は土錘である。残存する重量は 6.2 g である。**42** はべっ甲製の髪留めである。表面右側に草花文を陰刻し、側縁を面取りする。裏面長軸の両端に留め金具の痕跡が認められる。**43** は昭和二年製造の一銭銅貨である。

第 5 節　遺構に伴わない遺物

中世～近世の遺構面を検出するまでに、多数の遺物を包含層出土として取り上げた。弥生土器をはじめ、国産・輸入陶磁器などを検出したが、その大半が土師器小皿または坏の破片であった。

以下に、出土層位別に遺物についての所見を記すが、下位層を撹乱したことで巻き上げた遺物を含むことから、出土遺物が必ずしも層位の形成時期を示すものではない。

1　３ｂ層出土の遺物（図 18、図版 10）

44 ～ **46** は龍泉窯系の青磁碗である。**44** は剣頭と細線の蓮弁文を有する。15 世紀後半～ 16 世紀前半の所産である。**45** は口縁部外面に省略化した雷文帯をもつ。15 世紀前半のものか。**46** は体部外面に口縁端部直下まで達する極細線の線描蓮弁文をもつ。**47** ～ **49** は白磁の皿である。**47** は体部が内湾し、直立する口縁端部は丸くおさめる。器壁は薄く、釉に黒斑が混ざる。大宰府分類の皿Ⅵ類に属し、11 世紀後半～ 12 世紀前半に位置付けられる。**48** は口縁部が外反し、端部を丸くおさめるものである。大宰府分類の皿Ⅲ類に属し、12 世紀中頃に位置付けられる。**49** の高台・底部・体部下半は露胎で、見込みの釉を剥ぎ取る。高台周辺は丁寧に成形され、畳付は幅広な面をもち、高台の外裾に段を設けている。15 世紀代のもの。**50**・**51** は青花碗である。**50** の器壁は薄く、外反する口縁部の端部は鋭い。体部外面に牡丹唐草文、口縁部内面に四方襷文を描く。森分類の碗Ⅴｂ類に属し、17 世紀初頭に位置づけられる。**51** は内湾するやや厚みのある体部をもち、口縁端部を丸くおさめる。体部外面には花文を描き、口縁部内面に 1 重の圏線を施す。森分類の碗Ⅱ類に属するものか。**52** は青花皿である。体部外面に唐草文、見込みに十字花文を描く。森分類の皿Ⅰｂ類に属し、16 世紀後半に位置付けられる。**53**・**54** は肥前系磁器碗である。ともに 18 世紀代の所産か。**55** は肥前系磁器皿である。台形状の低い高台をもち、釉が剥ぎ取られた畳付に砂粒が付着する。見込に花文を描く。17 世紀代の所産である。**56** は薩摩焼の甕の底部である。胎土の色調は赤褐色で、外面に暗褐色、内面に黒色の釉を施す。底部裏面は露胎で、切り離し時の糸切り痕が明瞭に残る。**57**・**58** は土錘である。残存する重量は、**57** が 8.0ｇ、**58** が 8.1ｇである。

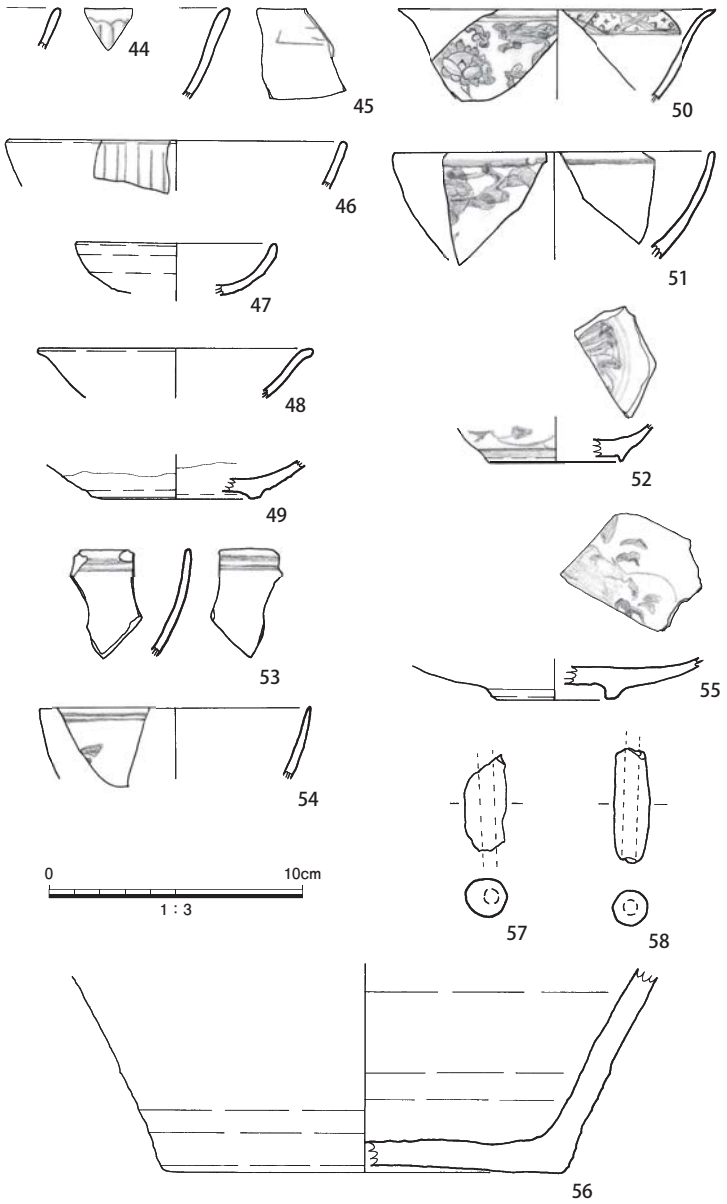


図 18　３ｂ層出土の遺物

2　３ａ層出土の遺物（図 19、図版 11）

59・**60** は土師器小皿である。体部が外方に開くものであるが、**59** の立ち上がりは低い。底部の切り離しは、ともに糸切りよる。**61** は白磁碗である。器壁は厚く、口縁部は外半する。坏部はやや浅い。見込の釉は蛇ノ目に剥ぎ取られる。台形状の高い高台を有し、畳付の釉を剥ぎ取る。16 ～ 17 世紀のもの

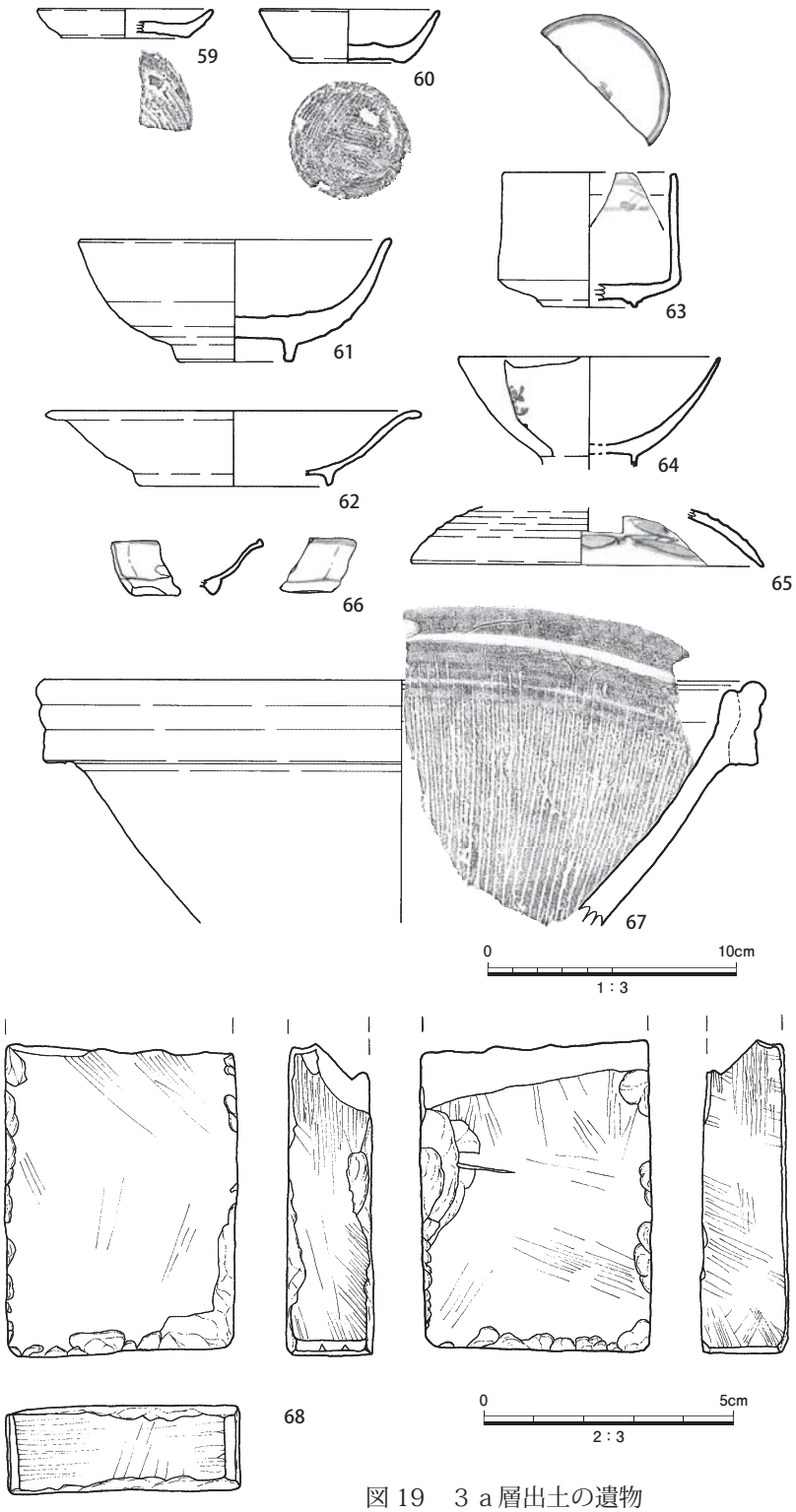


図 19　３ａ層出土の遺物

か。**62** は白磁皿である。口縁端部は大きく外反する。器壁は全体的に薄いが、厚みのある高台をもち、畳付の釉は外面側から削り取られ面をなす。森田分類の皿Ｅ－２類に属し、16 世紀代に位置付けられる。**63** ～ **65** は肥前系磁器で、**63** は筒形碗、**64**・**65** は碗である。**63** は外面に青磁釉を施す。高台は小さく、畳付の釉を剥ぎ取る。口縁部内面に四方襷文を描き、見込に２重の圏線と五弁花を施す。18 世紀後半～ 19 世紀初頭の所産である。**64** はやや内湾気味に開く体部をもち、器壁は全体的に薄い。径の小さい細い高台を有する。体部外面に梅花文を描く。**65** は蓋部で、体部内面に笹文を描く。18 ～ 19 世紀の所産か。**66** は角坏である。にぶい黄色釉を施し、畳付の釉を剥ぎ取る。**67** は関西系の擂鉢である。体部外面は回転によるケズリで調整する。体部内面に施された擂目の先端は横ナデによって整えられている。18 世紀後半のものか。**68** は淡緑色頁岩製の扁平な長方形をなす砥石である。残存するすべての面に使用痕が確認できる。

３　２層出土の遺物（図 20、図版 11）

69 は同安窯系の青磁碗である。体部上位で小さく内傾し、内面に圏線を描く。また、口縁端部は鋭く、外面側に面をもつ。体部外面に縦方向の櫛目文が施されている。大宰府分類の碗Ｉ－１ｂ類に属する。**70**・**71** は龍泉窯系の青磁碗である。**70** は口縁部外面に雷文帯をもつ。14 世紀末～ 15 世紀前半の所産である。**71** は体部外面に細線の蓮弁文をもつが、剣頭と蓮弁の単位はやや崩れている。また、口縁端部直下に周回する１条の細線を施す。15 世紀後半のもの。**72** は青花碗である。細く長い高台を有し、畳付の釉は剥ぎ取られる。体部の外内面に唐草文、見込みに圏線と菊花文を描く。また、底部に方

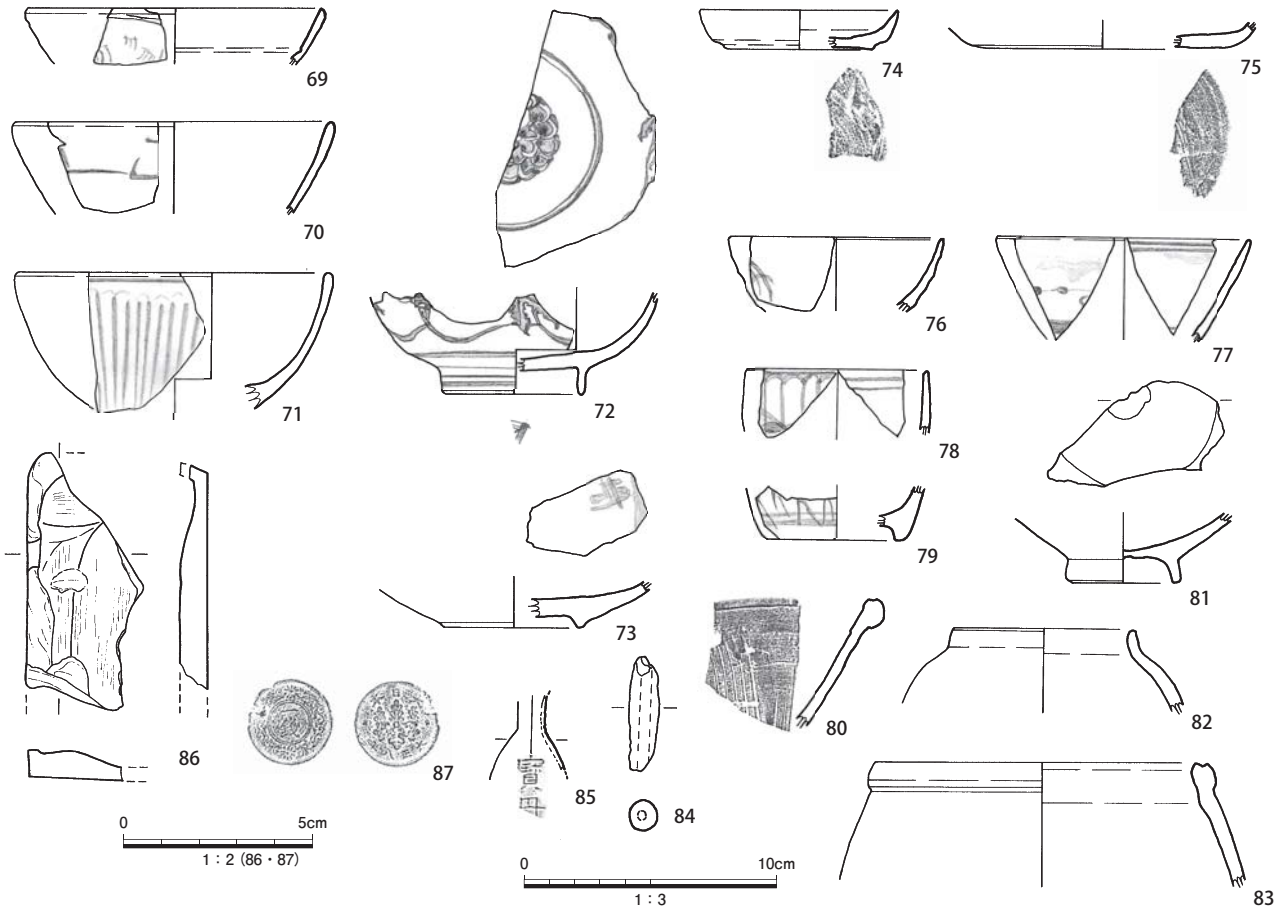


図 20　2 層出土の遺物

形の字款を施す。森分類の碗Ⅳ a 類に属し、16 世紀後半に位置付けられる。**73** は華南系の青花皿である。台形状の低く突出する高台を有し、畳付の釉を剥ぎ取る。胎土は暗い灰黄色で、釉も暗い灰白色をなす。見込に「寿」になるものか文字文を描く。16 世紀代の所産か。**74** は土師器小皿、**75** は土師器坏である。ともに底部の糸切り痕が残る。**76** ～ **79** は肥前系磁器である。**76**・**77** は碗である。**77** は体部外面に梅花文が施される。**78**・**79** は猪口である。**78** の体部外面には虫籠と蝶を描く。若干、釉の色味に違いもあるが、同一固体の可能性がある。18 世紀代か。**80** は肥前系擂鉢である。器壁は薄く、体部内面には間隔の広い擂目を施すが、先端は整えていない。胎土の色調は暗褐色であり、黒褐色の釉を玉縁状の口縁部にのみ施す。17 世紀後半の所産である。**81** は関西系の磁器碗である。径の小さい高台を有する。見込の釉を蛇ノ目に大きく剥ぎ取る。**82**・**83** は薩摩焼の土瓶である。**82** は内湾する体部から直立する口縁部を有する。灰黄色の釉が内外面に見られ、ややざらつく。**83** は内傾する体部に口縁部を玉縁状に仕上げ、面をもつ端部上面に沈線がめぐる。外面に暗緑色の釉を施し、内面の上半に釉が垂れる。**84** は土錘である。残存する重量は 4.6 g である。**85** はガラス瓶である。体部中央に「寶丹」の銘をもつ。**86** は頁岩製の石硯である。0.7cm と全体的に厚みはなく、額部と側縁部の削り出しも小さい。**87** は大正八年の製造の一銭銅貨である。

4　0 層出土の遺物（図 21、図版 12）

88 ～ **97** は弥生土器である。**88** は下城式系の甕で、直立する口縁部のやや高い位置に、キザミを有する突帯を 1 条貼り付ける。また、外傾して面をなす口縁端部の外側にも、キザミが確認できる。体部外

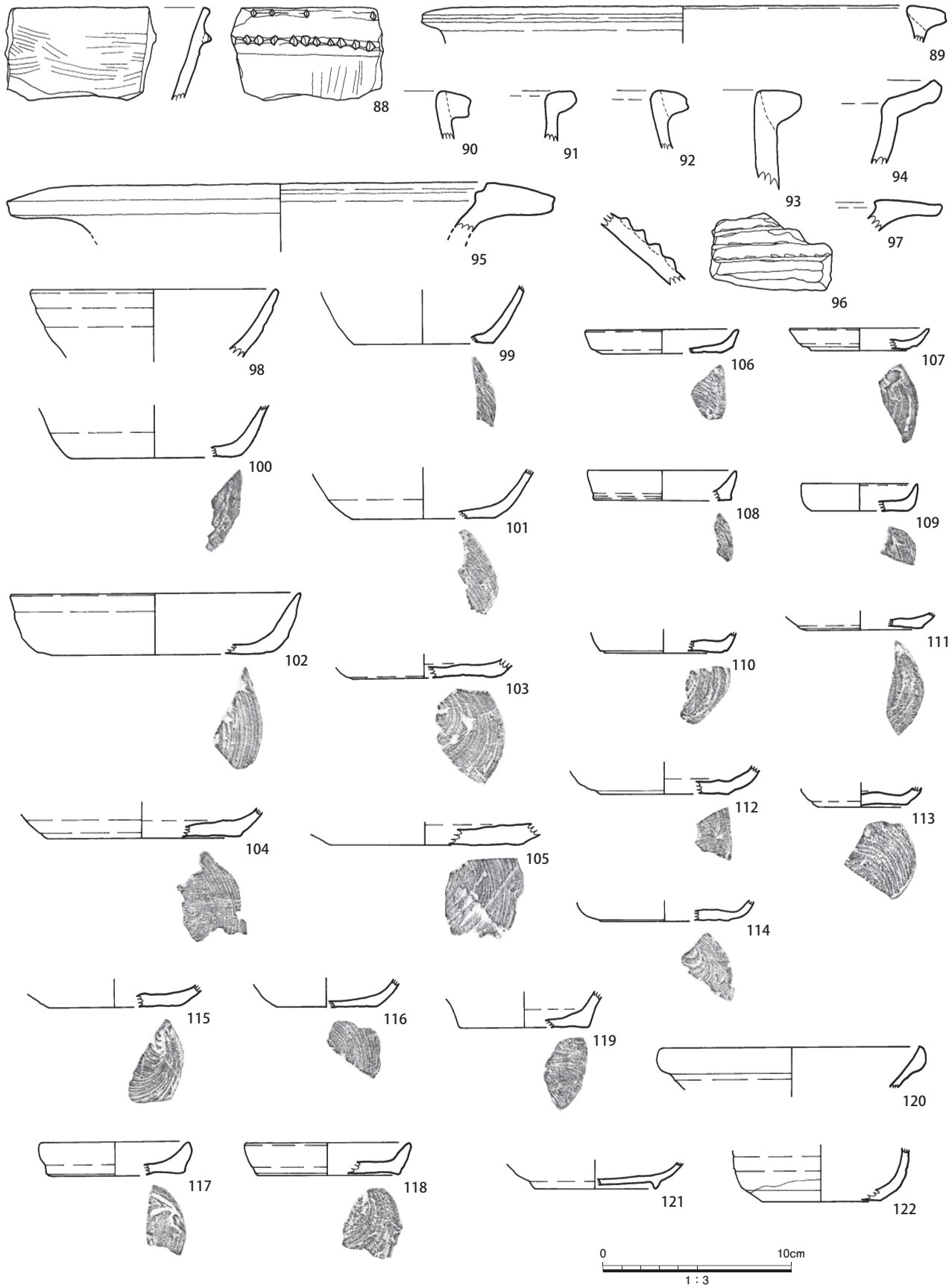

88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
0
10cm
1：3

図 21　０層出土の遺物

面は縦方向、内面は横方向のハケで調整する。**89**～**93**は直立あるいは内湾する口縁部に逆「L」字をなすように端部を貼り付けるものである。口縁端部の形状は、すべて断面台形をなすが、**90**以外はより三角形に近い。**94**は「く」の字に屈曲した口縁部を有する甕である。つまみ上げながらナデ調整された口縁端部は、小さく山形に面をなす。**95**・**96**は山ノ口式系の壺である。**95**は口縁部を大きく外方へ折り返すもので、水平よりやや外傾させる。口縁部内面に1条の突帯を貼り付ける。胎土の色調は浅い黄橙色をなす。**96**は肩部で4条の突帯を貼り付ける。胎土に雲母を含み、色調は暗褐色を呈する。**97**は断面が鋤先状をなす壺の口縁部である。**98**～**105**は土師器坏で、**98**以外は糸切りによる底部切り離しの痕跡が確認できる。なお、**102**の口縁端部については、外面に施された強い横方向のナデにより鋭く仕上げる。**106**～**119**は土師器小皿である。**119**がヘラ切りで切り離す以外は、糸切りによって底部の切り離しを行う。**106**～**110**は、体部の立ち上がりが小さな浅い小皿である。このうち、**108**の体部と底部の境はほぼ直角をなす。**111**～**114**は体部と底部の境に鈍い段を設けることで、やや突出した底部となる。**117**・**118**の器壁は厚く、やや内湾する体部と底部の境は角をなす。**119**の体部は角をもって底部から外方へ立ち上がる。**120**は白磁碗である。口縁部に玉縁を有し、端部を鋭く仕上げる。大宰府分類の碗Ⅳ類に属し、12世紀前半に位置づけられる。**121**は白磁皿である。断面三角形の小さな高台をもつ。畳付の釉は外側から剥ぎ取られる。また、高台に砂粒が付着する。森田分類の皿E－2類に属し、16世紀代に位置付けられる。**122**は瀬戸美濃系の平底になる茶入か。施釉の範囲は体部外面下半までで、体部外面最下は回転ケズリによって面をなす。ケズリより上位の調整は回転ナデである。

5　その他の出土遺物（図22、図版12）

試掘坑と撹乱坑から出土した遺物を一括した。

123は断面三角形の端部を貼り付ける弥生土器甕の口縁部である。**124**は須恵器壺である。大きく外反する口縁部を有し、端部を上方につまみ上げる。**125**は青磁の小形碗である。体部外面に細線の蓮弁文をもつが、明瞭ではない。16世紀代のものか。**126**は白磁皿である。断面三角形の高台をもち、畳付から高台内は露胎である。見込みの釉を蛇ノ目に剥ぎ取る。森田分類E類に属する。16世紀代のもの。**127**は瓦質の羽釜である。短い顎部をやや下方に向けて貼り付ける。内面は横方向のハケで調整し、顎部貼り付けに伴う指頭痕が残る。**128**は石錘である。扁平な楕円形の砂岩を利用し、短軸の両端を打ち欠く。

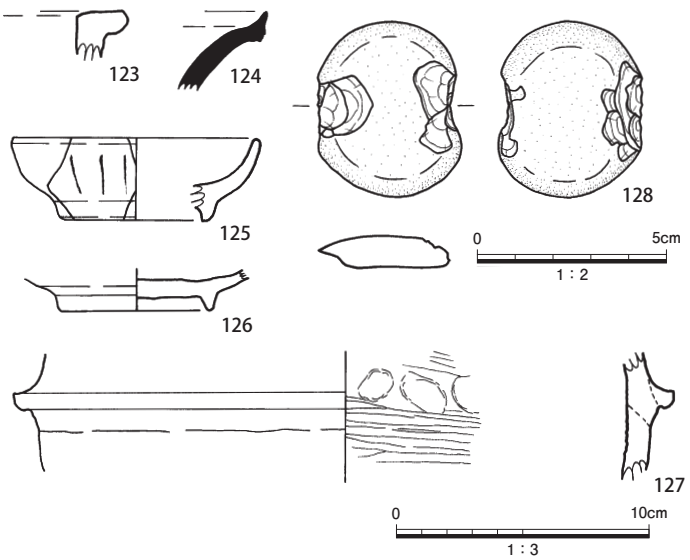


図22　その他の出土遺物

注

（1）　湯築城跡出土の輸入陶磁器の分類で坏B－1類としたもの、湯築城2段階の16世紀前半に位置づける。
柴田圭子　1998「第6章　まとめと考察　第2節　遺物」『湯築城跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第66集
財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

第Ⅳ章　自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第１節　放射性炭素年代測定

１　はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である。

２　試料と方法

試料No.	地点・層準	種　類	前処理	測定法
No.１	SE202、杭か？	生　材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
No.２	西壁９層（自然流路３期中位）	生　材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
No.３	西壁 12 層（自然流路３期下位）	生　材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
No.４	西壁 18 層（自然流路１期）	草　本	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS
No.５	SE201、炭化物	炭化材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

３　測定結果

試料No.	測定No.（PED-）	$\delta^{13}C$（‰）	^{14}C 年代（年 BP）	歴年代（較正年代）	
				１σ（68.2％確率）	２σ（95.4％確率）
No.１	10994	－28.15 ± 0.18	2225 ± 20	BC370-350（ 9.0%） BC300-200（59.2%）	BC380-340（18.8%） BC330-200（76.6%）
No.２	10995	－30.16 ± 0.13	2170 ± 20	BC350-300（45.6%） BC230-220（ 1.5%） BC210-180（21.1%）	BC360-270（54.9%） BC260-160（40.5%）
No.３	10996	－31.46 ± 0.25	2235 ± 25	BC380-350（17.4%） BC300-230（49.8%） BC220-210（ 1.0%）	BC390-340（24.7%） BC320-200（70.7%）
No.４	10997	－30.61 ± 0.19	2270 ± 20	BC400-350（54.9%） BC280-250（13.3%）	BC400-350（59.1%） BC300-230（36.3%）
No.５	10998	－29.04 ± 0.13	385 ± 20	AD1450-1500（58.8%） AD1600-1620（ 9.4%）	AD1440-1530（77.0%） AD1590-1620（18.4%）

ｉ）$\delta^{14}C$（デルタ）測定値

試料の測定 ^{14}C /^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C /^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}C$ 値を -25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正する。

ii）^{14}C 年代測定値

試料の ^{14}C /^{12}C 比から、現在（AD1950 年基点）から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。BP は Before Physics（Present）を示す。

iii）暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th（ウラン / トリウム）年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線データは IntCal 04、較正プログラムは OxCal 3.1 である。

暦年代（較正年代）は、^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により１σ（シグマ）（68.2％確率）と２σ（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。（）内の％表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

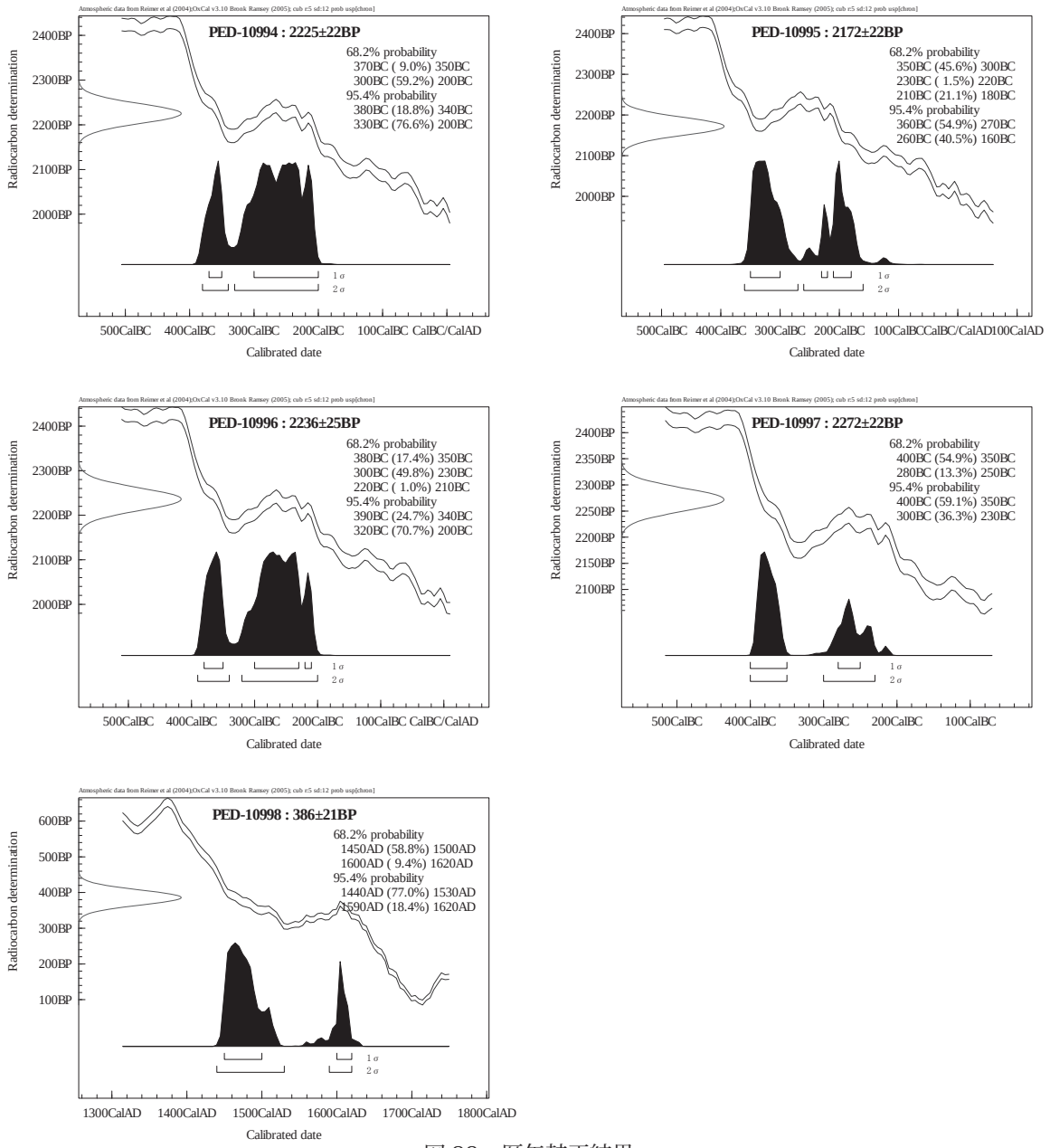


図 23　暦年較正結果

4　所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№1では2225±20年BP（2σの暦年代でBC380～200年）、№2では2170±20年BP（BC360～160年）、№3では2235±25年BP（BC390～340, 320～200年）、№4では2270±20年BP（BC400～350, 300～230年）、№5では385±20年BP（AD1440～1530, 1590～1620年）の年代値が得られた。

第2節　植物珪酸体分析

1　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO 2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

2　試料

分析試料は、南壁地点から採取された8点および**SC208**から採取された5点の計13点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3　分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4　分析結果

ⅰ）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図 25 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ムギ類（穎の表皮細胞）、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、ウシクサ族Ｂ（大型）、Ａタイプ（くさび型）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、その他

ⅱ）植物珪酸体の検出状況

南壁地点　下位の８層（試料８：砂層）では、植物珪酸体がほとんど検出されなかった。７層（試料７）から６層（試料６）にかけては、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、ネザサ節型、マダケ属型、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などが出現している。５層（試料５）から４層（試料４）にかけては、ススキ属型やネザサ節型が増加し、イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）が出現している。イネの密度は 8,000 個 /g 前後と高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個 /g を上回っている。ムギ類（穎の表皮細胞）の密度は 700 個 /g と低い値であるが、穎（籾殻）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。３層（試料３）から１層（試料１）にかけても、おおむね同様の結果であるが、ムギ類（穎の表皮細胞）は検出されなかった。イネの密度は、３層（試料３）では 6,900 個 /g、２層（試料２）では 7,900 個 /g、１層（試料１）では 4,200 個 /g である。おもな分類群の推定生産量によると、５層より上位ではイネが優勢となっている。

ＳＣ２０８　埋土底部の６層（試料９）では、イネ、ヨシ属、ウシクサ族Ａ、ネザサ節型、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）などが検出された。イネの密度は 700 個 /g と低い値である。５層（試料８）と２層（試料７）では、ウシクサ族Ａ、ネザサ節型、ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などが検出されたが、いずれも少量である。埋土上部の１層（試料５）では、イネが多量に検出され、ススキ属型も比較的多く検出された。また、イネの籾殻（穎の表皮細胞）、ヨシ属、シバ属、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、ネザサ節型、ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）なども検出された。イネの密度は 9,900 個 /g と高い値である。Ⅲ層（試料３）では、イネやススキ属型が減少しており、イネの密度は 2,100 個 /g と比較的低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、１層ではイネが優勢であり、ススキ属型も比較的多くなっている。

５　植物珪酸体分析から推定される植生と環境

ｉ）南壁地点

下位の８層（砂層）の堆積当時は、河川の影響など何らかの原因で植物の生育には適さない環境であったと考えられるが、７層から６層にかけては、ヨシ属、ススキ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などのイネ科植物、およびシイ属、イスノキ属、クスノキ科などの樹木（照葉樹）が見られるようになったと推定される。

その後、５層の時期には稲作が開始され、１層の時期まで継続的に稲作が行われていたと考えられる。また、５層と４層の時期にはムギ類も栽培されていたと考えられる。当時の調査区周辺は、ススキ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）、マダケ属などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であり、遺跡周辺にはシイ属、イスノキ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

タケ亜科のうち、マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。また、メダケ節のメダケは建築用材や竹細工の材料などとして有用である。ススキ属は、屋根材や牛馬の飼料などとして重要である。

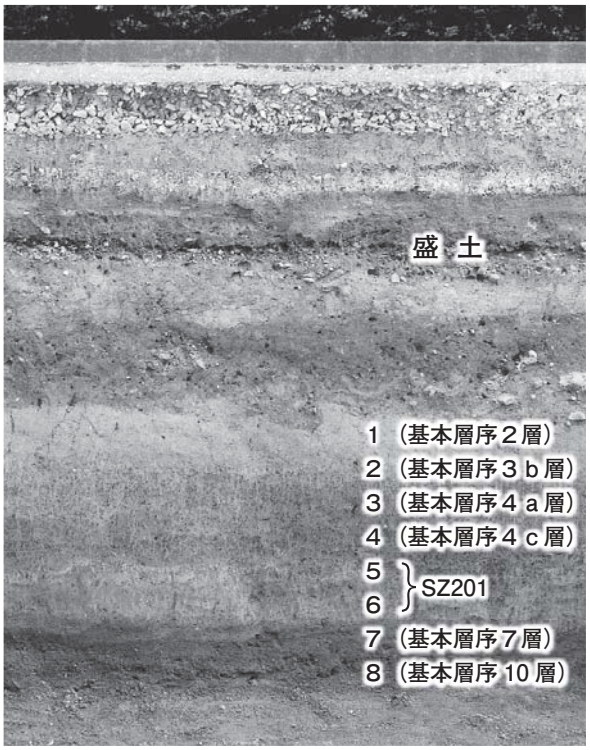


写真８　南壁地層断面（北から）

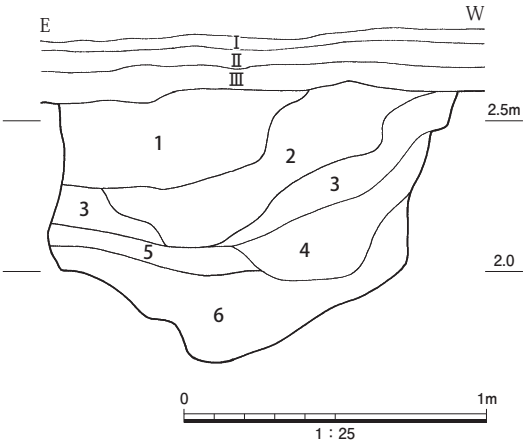


図 24　SC208 地層断面図

ii）ＳＣ２０８

井戸跡とも目された遺構の周辺では、稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの茎葉（稲藁）や籾殻が混入したと推定される。とくに埋土上部の１層ではイネの密度が高いことから、何らかの形で稲藁が利用されていた可能性が考えられる。稲藁の利用としては、屋根材や敷物、履物、俵、縄など多様な用途が想定される。

当時の遺構周辺には、ススキ属やチガヤ属、ヨシ属、メダケ属（おもにネザサ節）などが生育していたと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、イスノキ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

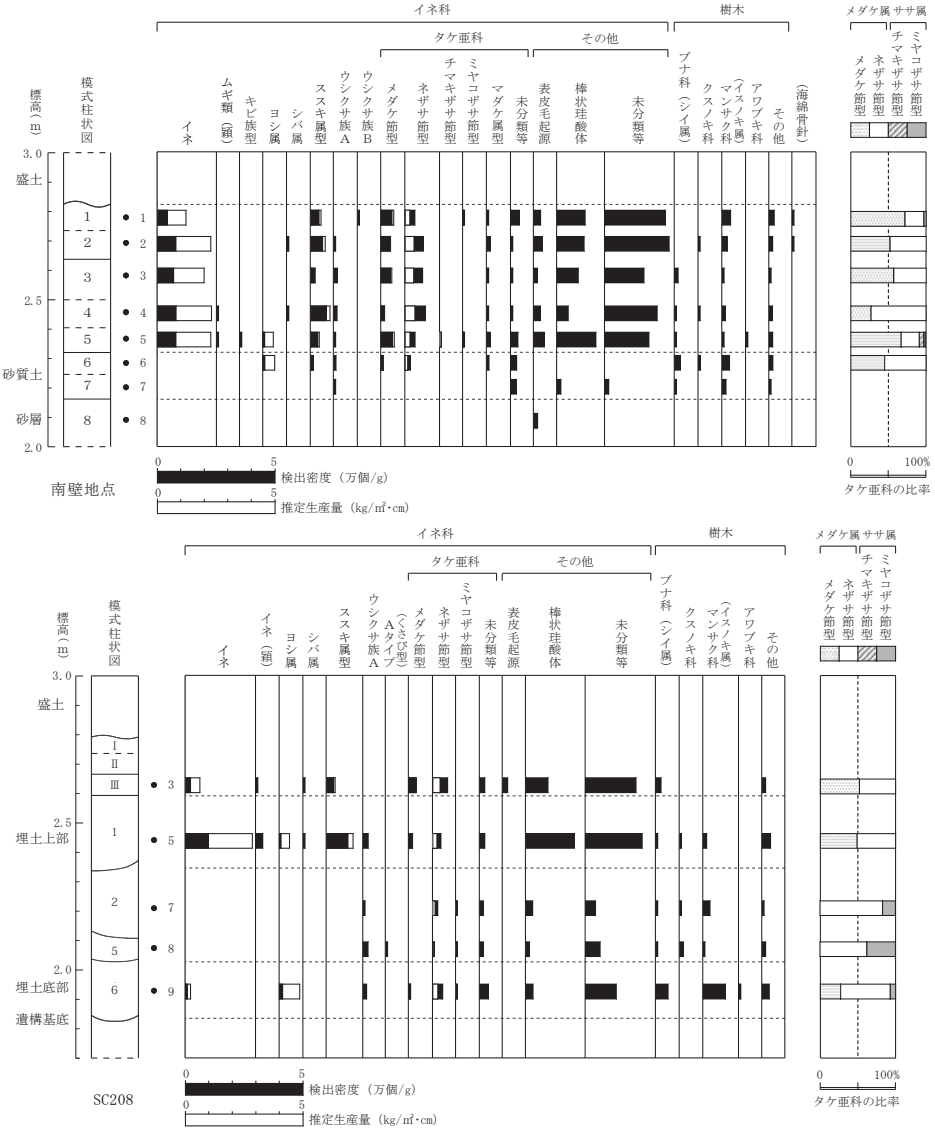
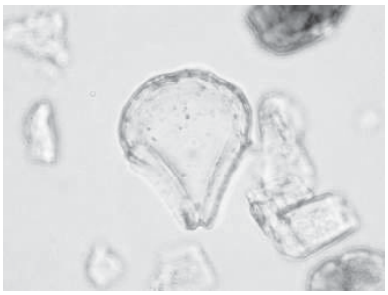


図 25　植物珪酸体分析結果

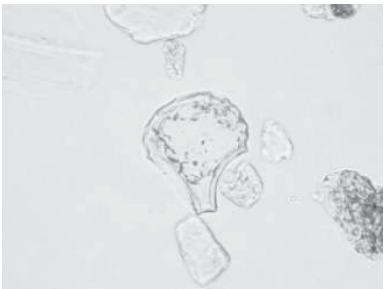
表 1　植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：× 100 個 /g）

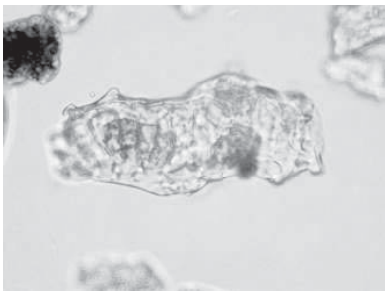
分類群	学名	地点・試料	南壁 1	2	3	4	5	6	7	8	SC208 3	5	7	8	9
イネ科	Gramineae														
イネ	*Oryza sativa*		42	79	69	80	79				21	99			7
イネ籾殻（穎の表皮細胞）	*Oryza sativa*（husk Phytolith）										7	28			
ムギ類（穎の表皮細胞）	*Hordeum-Triticum*（husk Phytolith）					7	7								
キビ族型	Paniceae type						7								
ヨシ属	*Phragmites*						7	8				7			14
シバ属	*Zoysia*			7		7					7	7			
ススキ属型	*Miscanthus* type		35	50	14	67	29	8			29	92			
ウシクサ族 A	Andropogoneae A type			7	14	13	7	8	7			21	7	20	14
ウシクサ族 B	Andropogoneae B type		7												
A タイプ（くさび型）	A type													7	
タケ亜科	Bambusoideae														
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		48	36	41	13	50	8			29	14			7
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		42	79	76	87	43	23			64	35	21	7	43
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.						7								
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		7				7						7	7	7
マダケ属型	*Phyllostachys*		7	14	7	7	14	8							
未分類等	Others		35	7	7	7	29	23	22		21	21	14	14	36
その他のイネ科	Others														
表皮毛起源	Husk hair origin		28	36	14	27	43			15	21				
棒状珪酸体	Rodshaped		118	114	89	47	164		15		93	205	28	14	29
未分類等	Others		256	272	165	221	186		15		214	240	42	61	130
樹木起源	Arboreal														
ブナ科（シイ属）	*Castanopsis*				14	7	7	23	7		21	7	7	7	51
クスノキ科	Lauraceae			7		7		8				7	7	14	
マンサク科（イスノキ属）	*Distylium*		35	21	7	13	7	30	15			14	28	7	94
アワブキ科	Sabiaceae						7								7
その他	Others		21	14	7	13	14	15	7		14	35	7	14	29
（海綿骨針）	Sponge		7	7											
植物珪酸体総数	Total		678	743	522	623	714	158	90	15	543	834	170	169	470
おもな分類群の推定生産量（単位：kg /㎡ ・cm）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出															
イネ	*Oryza sativa*		1.22	2.31	2.02	2.36	2.31				0.63	2.91			0.21
ヨシ属	*Phragmites*						0.45	0.47				0.45			0.91
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.43	0.62	0.17	0.83	0.35	0.09			0.35	1.14			
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		0.56	0.41	0.48	0.16	0.58	0.09			0.33	0.16			0.08
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		0.20	0.38	0.36	0.42	0.21	0.11			0.31	0.17	0.10	0.03	0.21
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.						0.05								
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		0.02				0.02						0.02	0.02	0.02
タケ亜科の比率（%）															
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		72	52	57	27	67	45			52	49			27
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		25	48	43	73	24	55			48	51	83	62	66
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.						6								
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		3				2						17	38	7



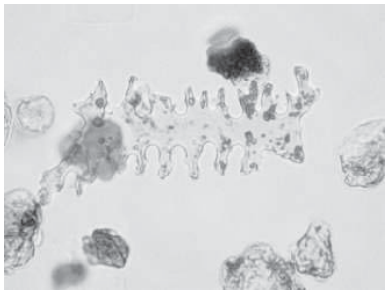
イネ
南壁　1



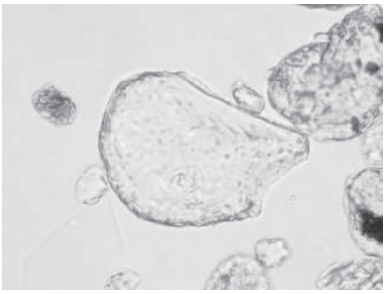
イネ
南壁　4



イネの籾殻（穎の表皮細胞）
SC208　5

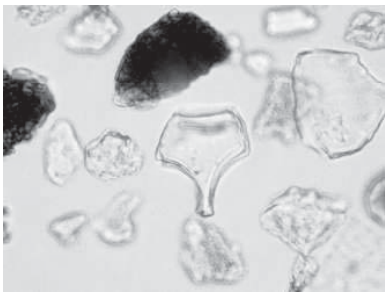


ムギ類（穎の表皮細胞）
南壁　5

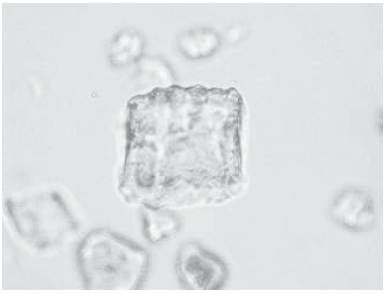


ヨシ属
南壁　6

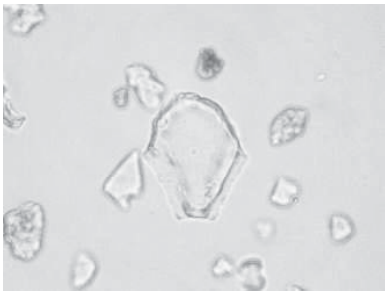
ススキ属型
SC208　5



シバ属
SC208　5

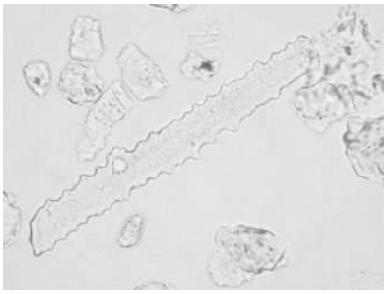


ネザサ節型
南壁　6

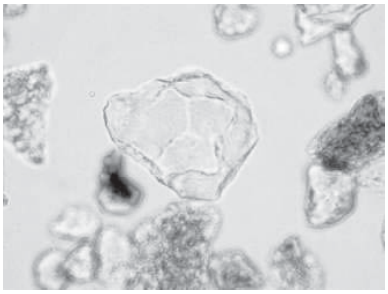


マダケ属型
南壁　2

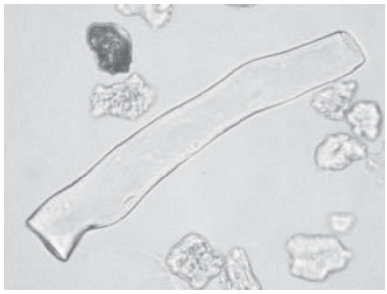
表皮毛起源
南壁　5



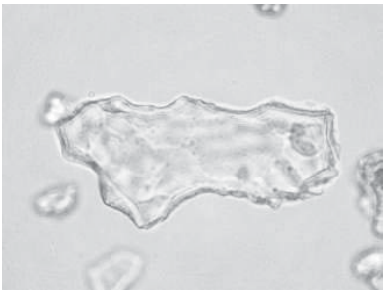
棒状珪酸体
南壁　5



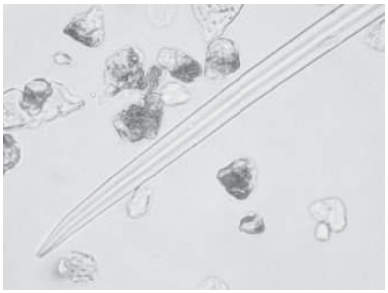
ブナ科（シイ属）
SC208　5



マンサク科（イスノキ属）
SC208　9



アワブキ科
南壁　5



海綿骨針
南壁　2

50μm

写真９　植物珪酸体（プラントオパール）

第３節　寄生虫卵分析および花粉分析

１　はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いて、トイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。花粉や寄生虫卵などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２　試料

分析試料は、井戸跡とも目されるSC208の埋土下部（５層，６層）から採取された２点である。

３　分析法

花粉および寄生虫卵の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から1 cm^3を秤量

２）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎

３）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

４）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

６）再び氷酢酸を加えて水洗処理

７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

４　分析結果

ⅰ）寄生虫卵分析

寄生虫卵および明らかな消化残査は、いずれの試料からも検出されなかった。

ⅱ）花粉分析

分類群　出現した分類群は、樹木花粉２、シダ植物胞子２形態の計４である。分析結果を表１に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

ハンノキ属、トチノキ

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

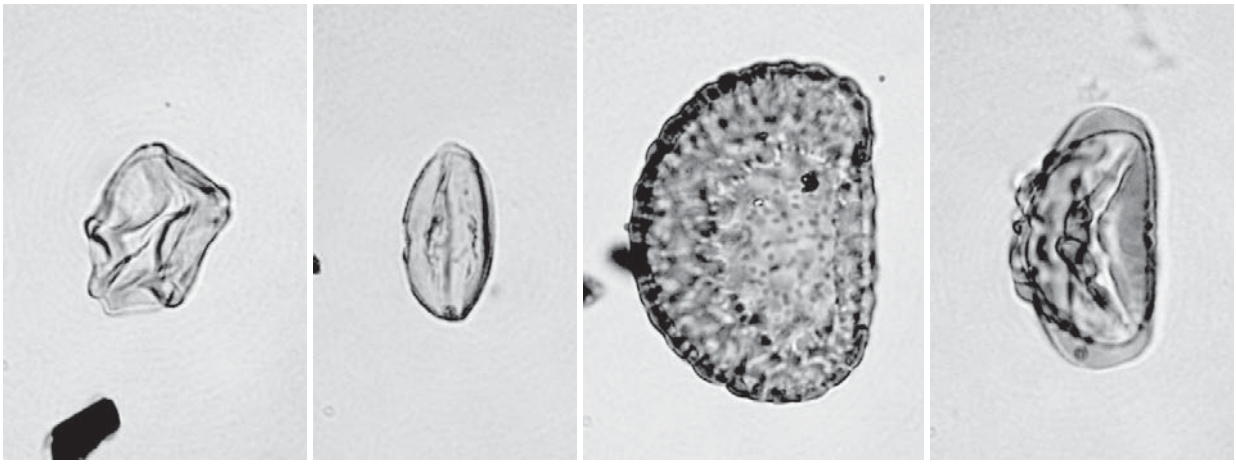
花粉群集の特徴　埋土底部の６層（試料９）では、樹木花粉のハンノキ属、トチノキ、およびシダ植物の単条溝胞子、三条溝胞子が検出されたが、いずれも少量である。５層（試料８）では、花粉がほとんど検出されなかった。

５　考察

SC208 の埋土では、寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されなかった。したがって、同遺構がトイレ遺構である可能性は考えにくい。花粉分析では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、埋土底部の堆積当時は、周辺にハンノキ属やトチノキおよびシダ類などが生育していたと考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

表２　寄生虫卵分析・花粉分析結果

分類群		SC208	
学名	和名	8	9
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉		
Alnus	ハンノキ属	1	1
Aesculus turbinata	トチノキ		1
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子		9
Trilate type spore	三条溝胞子		1
Arboreal pollen	樹木花粉	1	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0
Total pollen	花粉総数	1	2
Pollen frequencies of 1cm^3	試料 1cm^3 中の花粉密度	0.6 ×10	1.2 ×10
Unknown pollen	未同定花粉	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	10
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(-)



1 ハンノキ属　2 トチノキ　3 シダ植物単条溝胞子　4 シダ植物三条溝胞子

10 μm

写真 10　花粉・胞子

第４節　珪藻分析

１　はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

２　試料

分析試料は、SC208 の埋土下部（５層、６層）から採取された２点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

３　分析法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

１）試料から 1 cm^3 を秤量

２）10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置

３）上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（５～６回）

４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

５）マウントメディアによって封入し、プレパラート作成

６）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600 ～ 1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 100 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

４　結果

ｉ）分類群

出現した珪藻は、真－中塩性種（海－汽水生種）４分類群、中－貧塩性種（汽－淡水生種）４分類群、貧塩性種（淡水生種）54 分類群である。分析結果を表１に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性については Lowe（1974）や渡辺（2005）、陸生珪藻については小杉（1986）、環境指標種群の海水生種から汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）の記載を参照した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔真－中塩性種〕

Diploneis smithii、*Navicula marina*

〔中－貧塩性種〕

表３　珪藻分析結果

分類群	SC208 8	SC208 9
貧塩性種（淡水生種）		
Achnanthes exigua		1
Achnanthes inflata	2	3
Achnanthes lanceolata		4
Achnanthes spp.	2	
Amphora copulata	5	4
Amphora montana	3	3
Aulacoseira ambigua		3
Aulacoseira valida		1
Caloneis spp.		1
Cocconeis neodiminuta		1
Cocconeis placentula	8	36
Cymbella cuspidata		2
Cymbella sinuata	3	6
Cymbella tumida	1	37
Cymbella turgidula		20
Diploneis finnica		2
Diploneis spp.	1	1
Epithemia adnata		3
Epithemia turgida		2
Eunotia minor		2
Eunotia pectinalis		1
Eunotia praerupta		5
Eunotia soleirolii		2
Fragilaria capucina		2
Fragilaria construens		2
Fragilaria leptostauron		2
Fragilaria pinnata		3
Frustulia vulgaris	1	
Gomphonema acuminatum		2
Gomphonema angustatum		4
Gomphonema angustum		7
Gomphonema clevei	3	3
Gomphonema gracile		1
Gomphonema grovei		3
Gomphonema minutum		4
Gomphonema parvulum		12
Gomphonema spp.	4	12
Gomphonema truncatum		3
Hantzschia amphioxys	3	1
Navicula contenta	1	2
Navicula elginensis		3
Navicula goeppertiana		1
Navicula mutica		3
Nitzschia spp.	2	1
Pinnularia appendiculata		2
Pinnularia borealis	1	4
Pinnularia microstauron		1
Pinnularia spp.		1
Pinnularia subcapitata	1	1
Pinnularia viridis	1	
Rhoicosphenia abbreviata	1	9
Stauroneis phoenicenteron		1
Surirella angusta		1
Synedra ulna		8
中－貧塩性種（汽－淡水生種）		
Achnanthes brevipes	21	67
Amphora fontinalis		2
Diploneis ovalis		2
Rhopalodia gibberula		4
真－中塩性種（海－汽水生種）		
Actinocyclus sp.1		1
Diploneis smithii		7
Navicula capitata v. hungarica		1
Navicula marina		6
合　計	64	329
未同定	1	13
破片	46	158
試料 1 cm^3 中の殻数密度	1.8 × 10^4	1.3 × 10^5
完形殻保存率（％）	－	68.4

Achnanthes brevipes、*Rhopalodia gibberula*

〔貧塩性種〕

Achnanthes inflata、*Achnanthes lanceolata*、*Amphora copulata*、*Amphora montana*、*Aulacoseira ambigua*、*Cocconeis placentula*、*Cymbella sinuata*、*Cymbella tumida*、*Cymbella turgidula*、*Epithemia adnata*、*Eunotia praerupta*、*Fragilaria pinnata*、*Gomphonema angustatum*、*Gomphonema angustum*、*Gomphonema clevei*、*Gomphonema grovei*、*Gomphonema minutum*、*Gomphonema parvulum*、*Gomphonema* spp.、*Gomphonema truncatum*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*Navicula elginensis*、*Navicula mutica*、*Nitzschia* spp.、*Pinnularia borealis*、*Rhoicosphenia abbreviata*、*Synedra ulna*

ii）珪藻群集の特徴

埋土底部の６層（試料９）では、珪藻密度が比較的低く、貧塩性種（淡水生種）の占める割合が72.6％、中－貧塩性種（汽－淡水生種）が 22.8％、真－中塩性種（海－汽水生種）が 4.6％となっている。貧塩性種（淡水生種）では、真・好流水性種の占める割合が高く、真・好止水性種、流水不定性種、陸生珪藻と続く。真・好流水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の *Cocconeis placentula*、真・好止水性種では *Cymbella tumida* が多い。また、中～下流性河川環境指標種群の *Cymbella turgidula*、*Rhoicosphenia abbreviata*、好流水性種の *Gomphonema parvulum*、好止水性種の *Synedra ulna* などが伴われる。中－貧塩性種（汽－淡水生種）では *Achnanthes brevipes* が優占し、真－中塩性種（海－汽水生種）では海水泥質干潟環境指標種群の *Diploneis smithii*、*Navicula marina* が検出された。５層（試料８）では、珪藻があまり検出されなかった。

５　珪藻分析から推定される堆積環境

SC208 の埋土底部の６層では、珪藻密度が比較的低いことから堆積環境の詳細な推定は困難であるが、中～下流性河川域の流水の影響のある滞水域の環境が推定され、干潟のような海水～汽水の影響も示唆される。８層では珪藻があまり検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては、１）珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったこと、２）水流や粒径による淘汰・選別を受けたこと、３）土層の堆積速度が速かったことなどが考えられる。

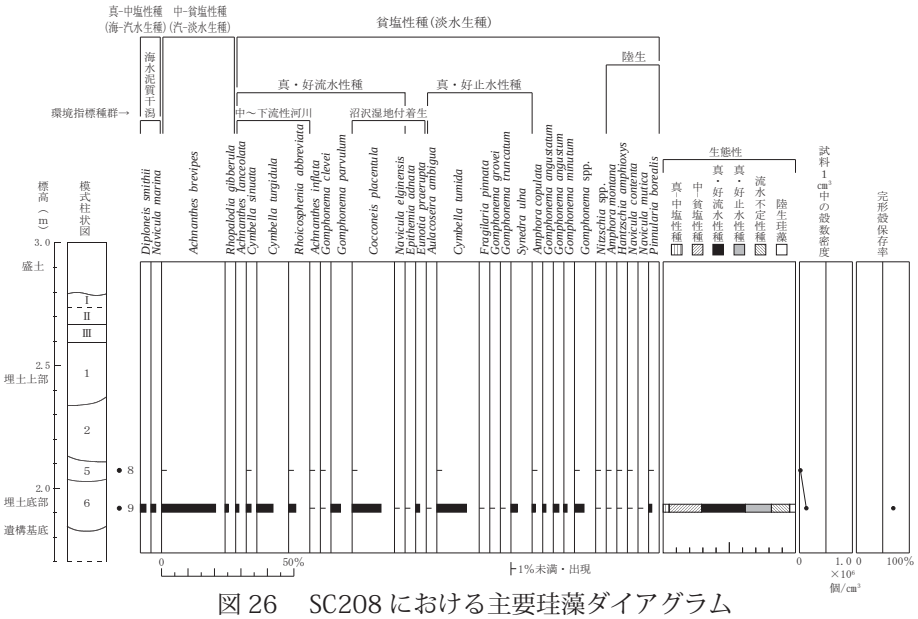
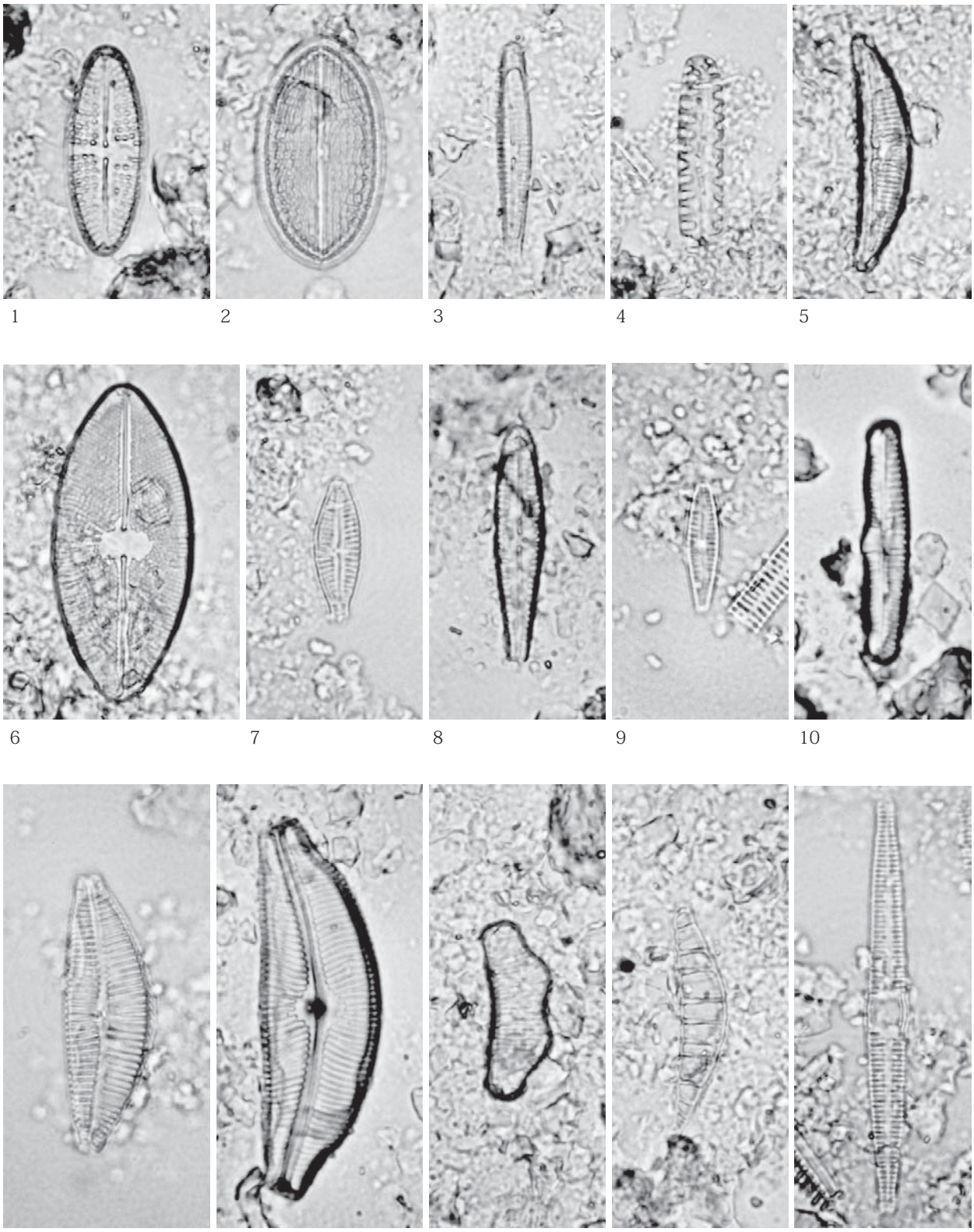


図 26　SC208 における主要珪藻ダイアグラム



1. *Achnanthes brevipes* 2. *Cocconeis placentula* 3. *Rhoicosphenia abbreviata* 4. *Pinnularia borealis*
5. *Amphora copulata* 6. *Navicula marina* 7. *Gomphonema parvulum* 8. *Gomphonema clevei*
9. *Gomphonema minutum* 10. *Cymbella sinuata* 11. *Cymbella turgidula* 12. *Cymbella tumida*
13. *Eunotia praerupta* 14. *Rhopalodia gibberula* 15. *Synedra ulna*

写真 11　珪藻

引 用 ・ 参 考 文 献

Bronk Ramsey C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program,Radiocarbon,37（2）, p.425-430.

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43（2A）, 355-363.

Lowe,R.L.（1974）Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. National Environmental Reserch Center, 333p.

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

Paula J Reimer et al.,（2004）IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46,p.1029-1058.

安藤一男 （1990） 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示 （1991） 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌 , 6 ,p.23-45.

小杉正人 （1986） 陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第 1 号，植生史研究会，p.29-44.

小杉正人 （1988） 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1 -20.

金子清俊・谷口博一（1987） 線形動物・扁形動物．医動物学．新版臨床検査講座，8，医歯薬出版，p.9-55.

金原正明・金原正子 （1992） 花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京 7 条 1 坊－．奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金原正明 （1993） 花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

金原正明 （1999） 寄生虫．考古学と動物学．考古学と自然科学，2，同成社，p.151-158.

金原正明 （2004） 寄生虫卵分析．環境考古学ハンドブック，朝倉書店，p.419-429.

島倉巳三郎 （1973） 日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集，60p.

杉山真二 （2000） 植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

杉山真二・藤原宏志 （1986） 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 －古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

杉山真二 （1999） 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38（2），p.109-123.

藤原宏志 （1976） プラント・オパール分析法の基礎的研究（1） －数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二 （1984） プラント・オパール分析法の基礎的研究（5） －プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

中村純 （1973） 花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純 （1980） 日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

中村俊夫 （2000） 放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代 , p.3-20.

渡辺仁治 （2005） 群集解析に基づく汚濁指数 DAIpo, pH 耐性能．淡水珪藻生態図鑑．内田老鶴圃，666p.

第Ⅳ章　まとめ

今回の調査では、周辺遺跡の調査成果からも弥生時代の生活痕跡の検出が予想できたが、結果として、調査区全域が周辺遺跡と同時代に機能していた自然流路の流域内であったことが判明した。確認した自然流路は、調査区内で１～３期に大別することができ、それぞれの年代測定の結果から 100 年にも満たない間に流路幅を狭めて、３期において安定期を迎えたことが判明した。自然流路３期が機能した時期は、出土の土器から弥生時代中期を中心としており、後期前半期ごろには埋没したと考える。なお、中期前半期の土器群と同一層位出土の自然木の年代測定結果が、2170 ± 20 年 BP（BC360 ～ 160）を示したことは、－分析対象が土器付着の炭化物ではなく、自然流路内の流木であるため、取り扱いには注意を要するが－非常に興味深い結果であった。

さて、本遺跡周辺では、約 300 m西側に位置する宮崎小学校遺跡、約 100 m北側に位置する別府町遺跡における調査事例があるにすぎない。当該地の弥生時代中期を論ずるほどに、周辺域の調査が充実しているとは言えず、断片的で限られた情報ではあるけれども、研究の端緒と思い、当該地域における弥生時代中期から後期前半期の様相について、以下で若干の概観をしてみたい。

まず、既往の調査概要を記すと、宮崎小学校遺跡では、やや北向きで東西方向に伸びる溝が検出され、中期を中心に後期初頭までの土器を大量に包含していた。出土の土器については、在地および周辺域のもの以外に、瀬戸内系の土器が含まれており注目したい。さらに、溝埋土からは、水田耕作を想起させるほどのプラントオパールが検出されている。次に、別府町遺跡では、中期後半から後期初頭に属する竪穴住居１棟が検出されている。本遺跡側である最南部では、畦畔などの明確な水田遺構の検出はないが、水田域とされる緩やかな落ち込みがあり、ここでもプラントオパールが検出されている。

本遺跡検出の自然流路は、弥生時代中期以前はさらに流域が広く、周辺域も常に洪水の影響を受けた不安定な土地であったと推測できる。その後、中期になってようやく安定して流れ始めたことで、前代までの洪水等がもたらした肥沃な土地である流路の左岸地帯一帯に生活圏が求められるようになったと考える。そして、左岸地帯の微高地上に集落域を展開し、自然堤防下の後背湿地において、水田域を形成したことが別府町遺跡の結果から推察できる。また、宮崎小学校遺跡検出の東西溝については、自然流路を利用した灌漑用水路と考え、最終的に水田域まで掘削が及んでいると推測する。その後の後期前半期以降には、この集落は継続しないのであるが、その理由として、自然流路３期を埋没させるほどの洪水が想定でき、集落の機能もそこで途絶えたと考える。

図 27　弥生時代中期～後期前半期の遺構分布

自然流路埋没後、当該地における積極的な土地利用は長期

にわたって行われず、中世末期から近世初頭にかけて利用された屋敷地を続く遺構として検出した。屋敷地の中心となる時期は 15 世紀後半期～ 16 世紀代で、検出遺構の一部は 17 世紀前半期にかかるものと考える。調査区北半部は、弥生時代の自然流路が形成した微高地であり、この微高地上で掘立柱建物を構成する柱穴群を多数検出し、屋敷地が形成されていたと考える。南側には、屋敷地を区画する２条の東西方向の溝をややくい違うように設け、屋敷側の溝 SE201 の延長上に冠木門門 201 を設けている。出土の遺物は、輸入・国産陶磁器もある程度の量を認めるが、圧倒的に土師器小皿および坏の利用が多い。なお、区画溝 SE201 の外側に近接する井戸 SF202、微妙に主軸の方位を異にする区画溝 SE201 と SE202 および掘立柱建物 SB201 と門 201 などを見ると、検出した遺構群のすべてが同時期に機能していたかという疑問が生じる。明確な時期決定の要素がないため、現段階では屋敷地の建て替えなどによる変化として捉えておきたい。

周辺域は古代末期から宇佐八幡宮領として開発された土地柄であり、近隣には成立時期は不明であるが八幡宮も勧請されている。今回の調査では屋敷地の南辺を捉えたのみであったが、屋敷地は北側に広がりをみせるもので、八幡宮の門前の一角を占めていたと考えられる。そして、近世延岡藩領期における分村や幕府領への編入の中で、当該屋敷地は廃絶したと理解しておきたい。

屋敷地の廃絶後は、植物珪酸体分析の結果からも、人の手が入らない湿地帯であったのではなく水田として利用されていたようで、近代になって調査地北側の道が県庁前通りとして整備されると、通りに面した宅地となる。近代の生活面で検出した畝群と畝間溝群は、敷地内にあったものか宅地に付随した畑地であったと考える。

畑地を埋める造成は、大きく２回に分けて行われている。昭和 37 年の裁判所設置時かそれ以前の区画整理によるものかの判断は難しいが、畝間溝の埋土から昭和２年の一銭銅貨が出土していることから、少なくとも昭和以前ではないことが分かる。そして、裁判所が設置されて以来は、現在に至っている。

今回の調査では、弥生時代、中世～近世、近代と多岐にわたる時代について、多くの新知見を得る結果となった。弥生時代の自然流路の検出は、当該地域の集落の立地と空間的な土地利用の解明を進める上で重要な成果であり、また、屋敷地の発見は、歴史的な手掛かりが少ない当該地における中世～近世の一様相を明らかにした。しかし、当該地域の歴史の究明にとっては、ほんの一握りの資料の蓄積であることは言うまでもなく、今回の成果がすべてを語るものではない。当該地域の歴史構築は、端緒についたばかりであることを強調しておく。

図　　版

遺跡上空付近から東側日向灘方面を望む（2006（平成 17）年 7 月撮影）

遺跡上空付近から南西側大淀川方面を望む（同上）

図版二　地層断面

西壁地層断面（１）（南東から）

西壁地層断面（２）（北東から）

図版三　弥生時代後期以前の自然流路

自然流路１～３期の堆積状況（南から）

自然流路３期出土の弥生土器（南東から）

図版四　中世～近世の遺構（一）

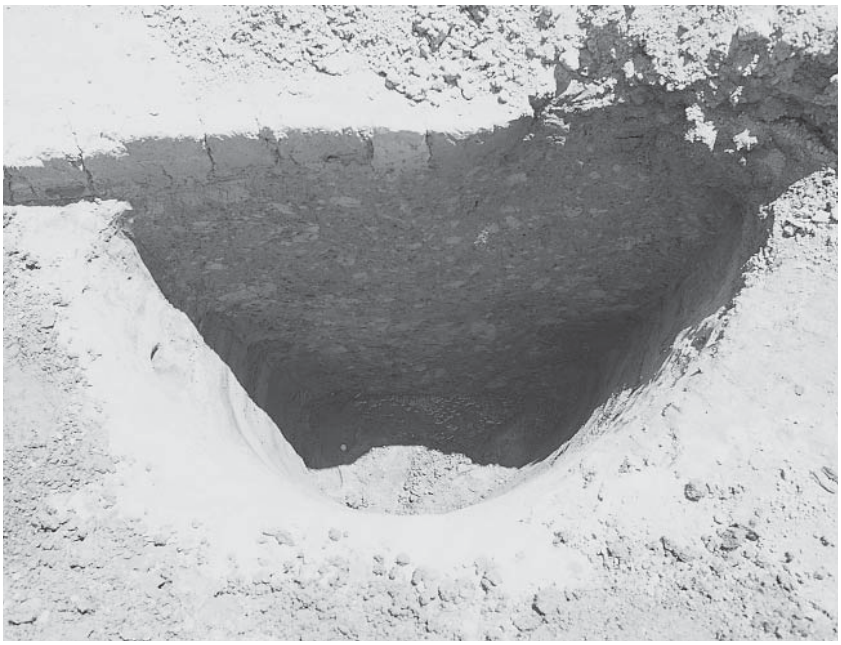
遺構全景（北西から）

西半部の遺構検出状況（南東から）

SB201 と SE201 の配置関係（1）（南東から）

SB201 と SE201 の配置関係（2）（北東から）

図版六　中世～近世の遺構（三）



SF201 埋土地層断面（西から）

SF202 埋土地層断面（東から）

SC208 埋土地層断面（北から）

図版七　中世～近世の遺構（四）

南半部の遺構検出状況（西から）

SE202 検出状況（南東から）

SC205 埋土地層断面（南から）

SC206 検出状況（南東から）

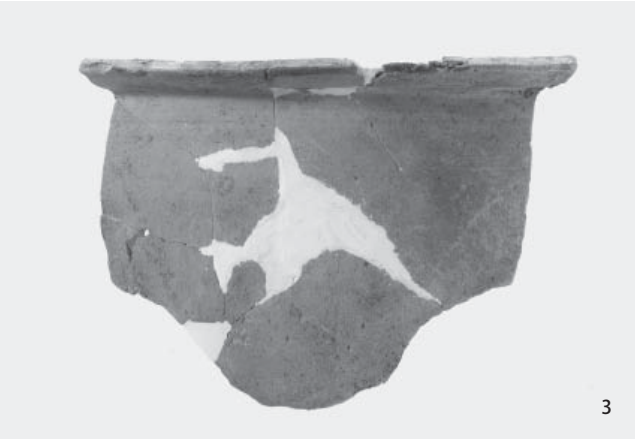
SC205 検出状況（南から）

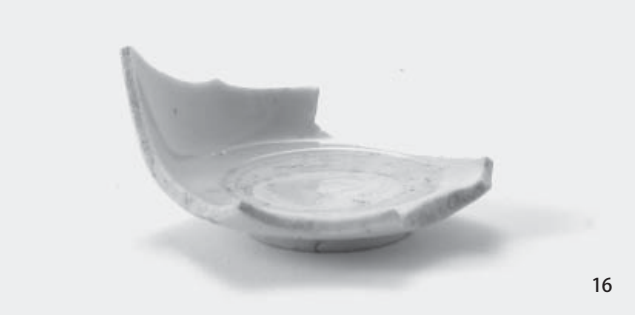
図版八　近代の遺構

遺構全景（北面から）

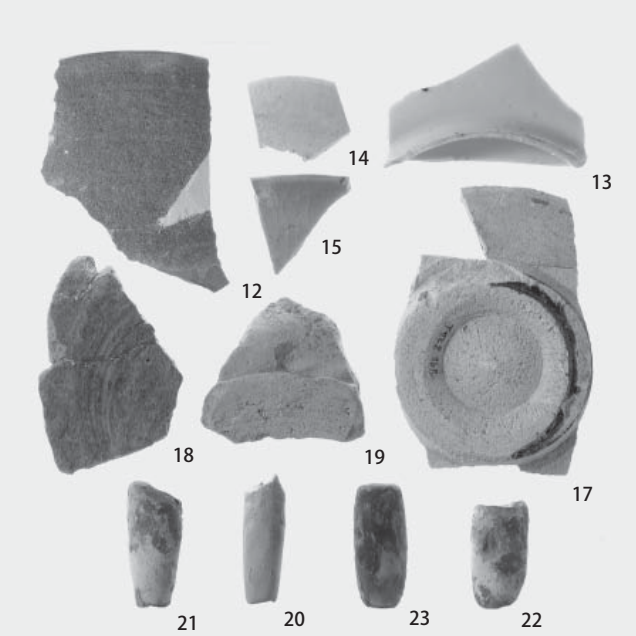
畝群と盛土間の排水溝（北から）

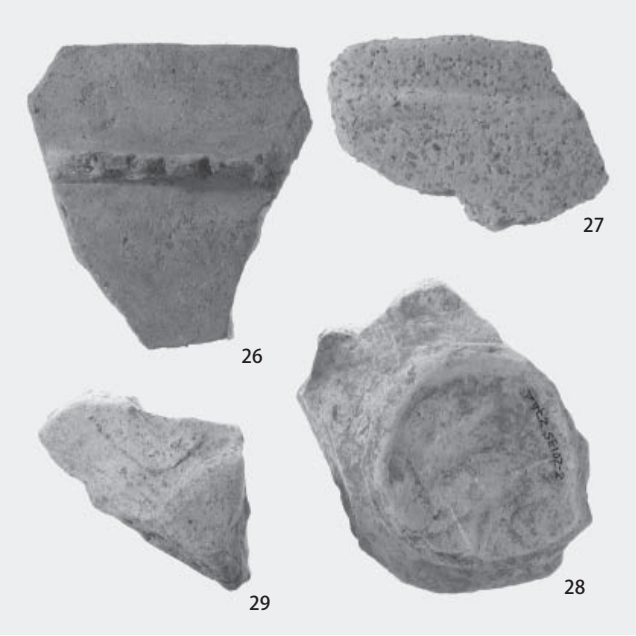
図版九　自然流路３期・第２面検出遺構出土の遺物

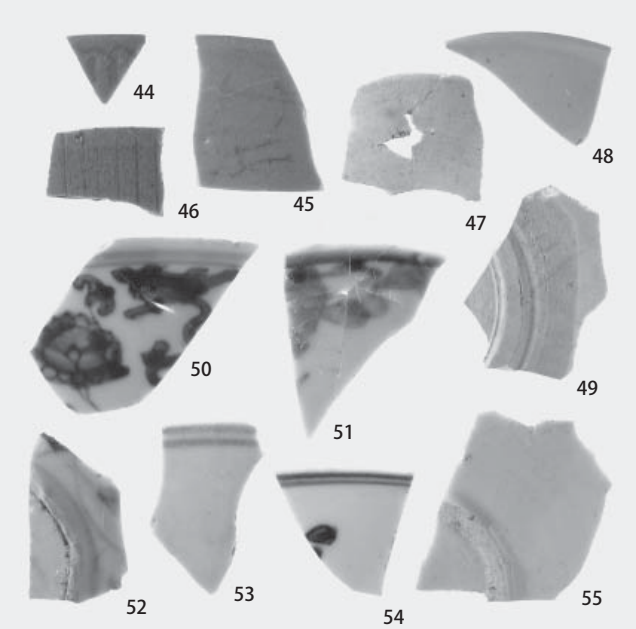


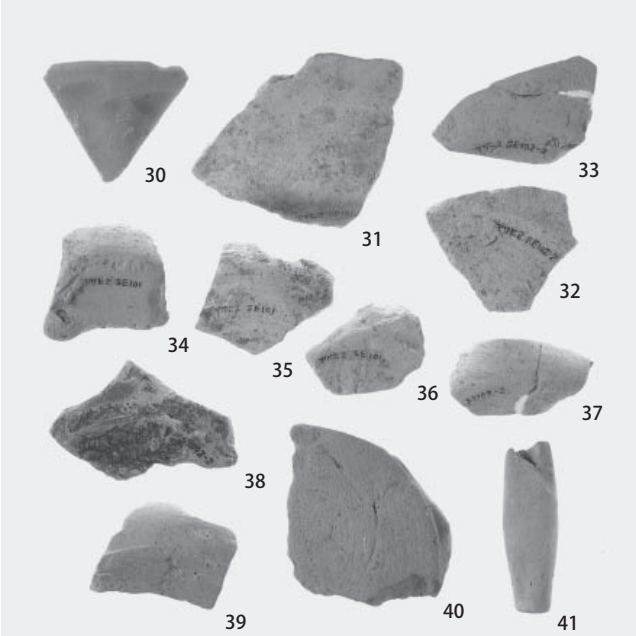


図版一〇　第2面検出遺構・第1面畝間溝群・3b層出土の遺物

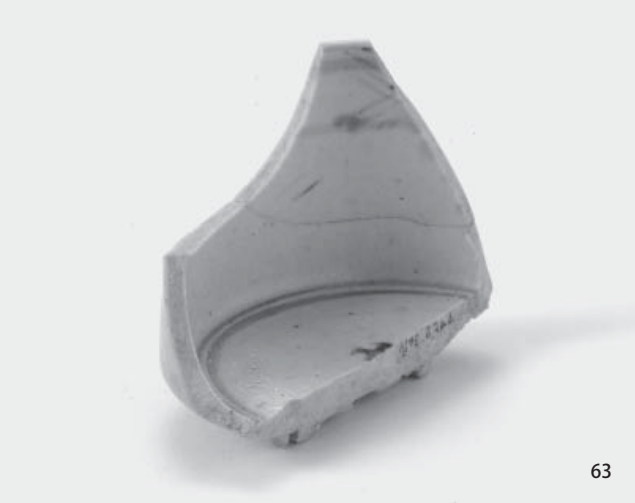


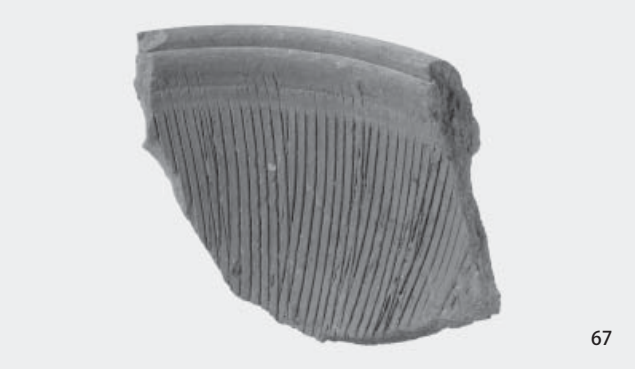


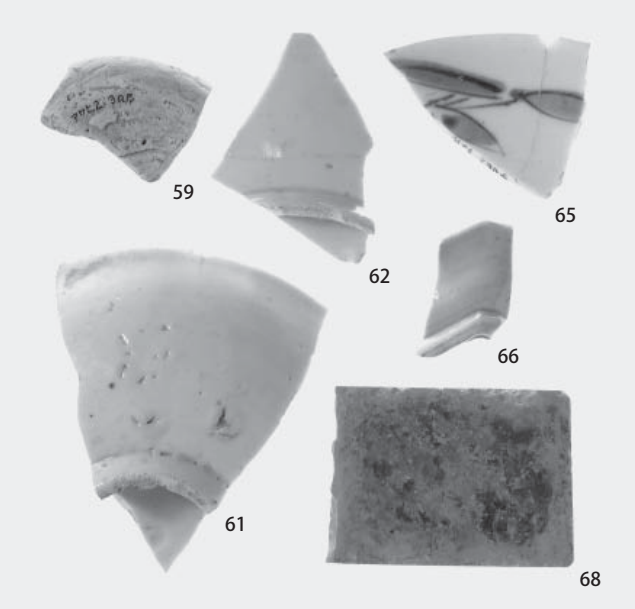


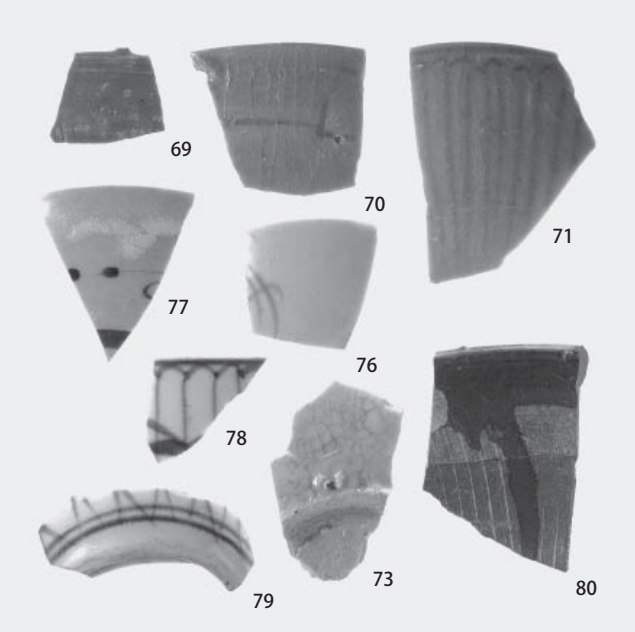


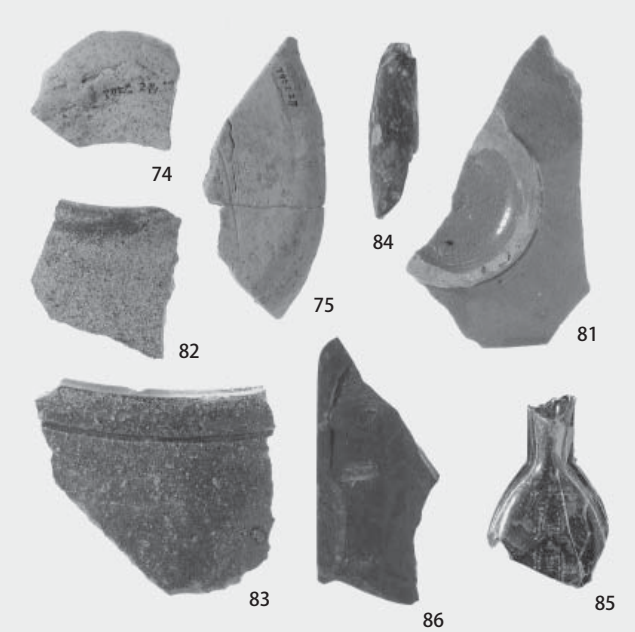
図版一一　3a層・2層出土の遺物



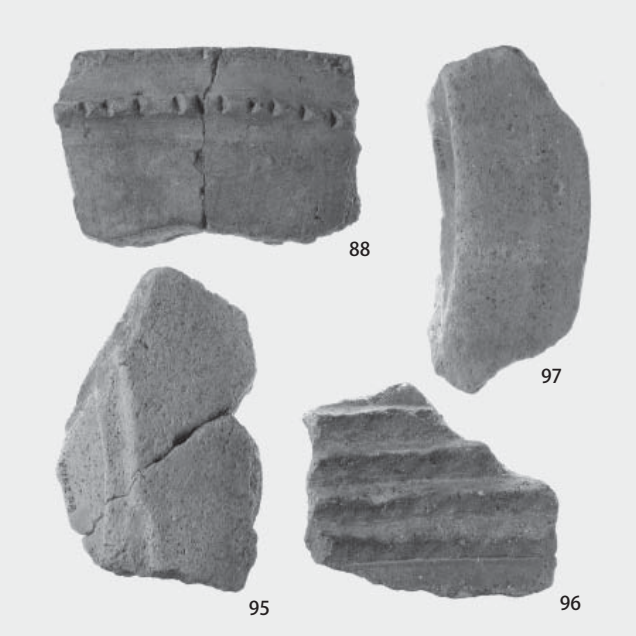


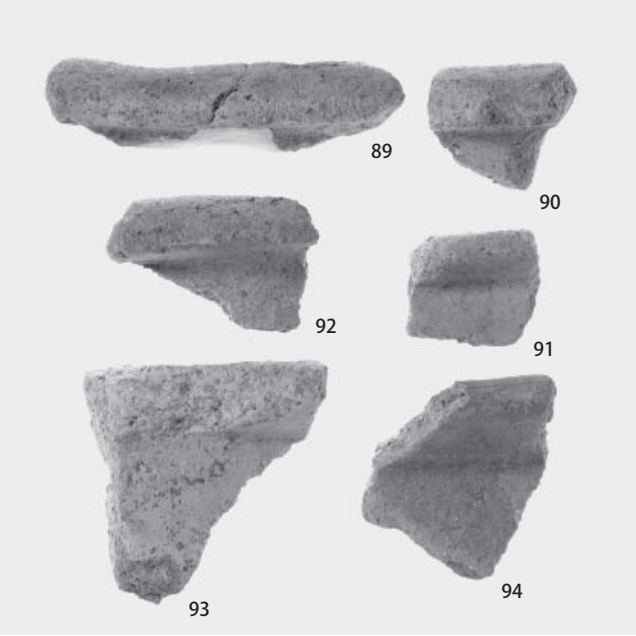


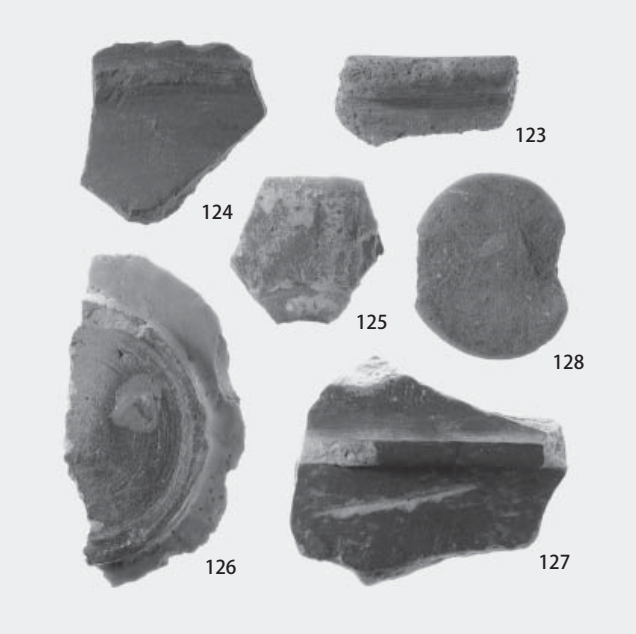


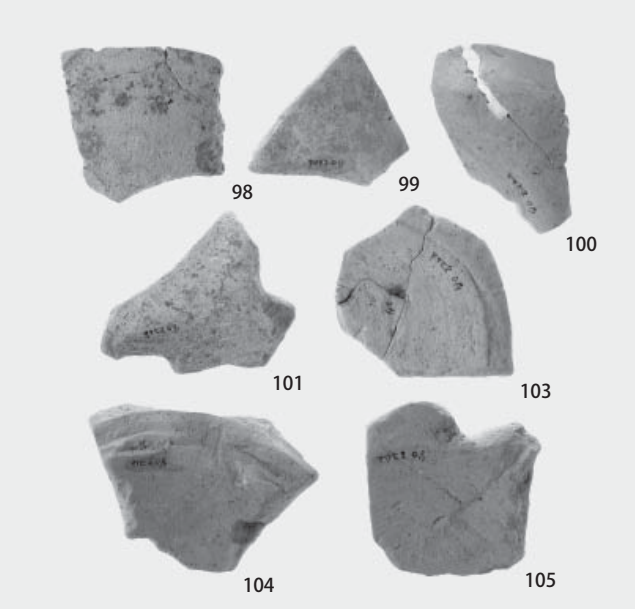


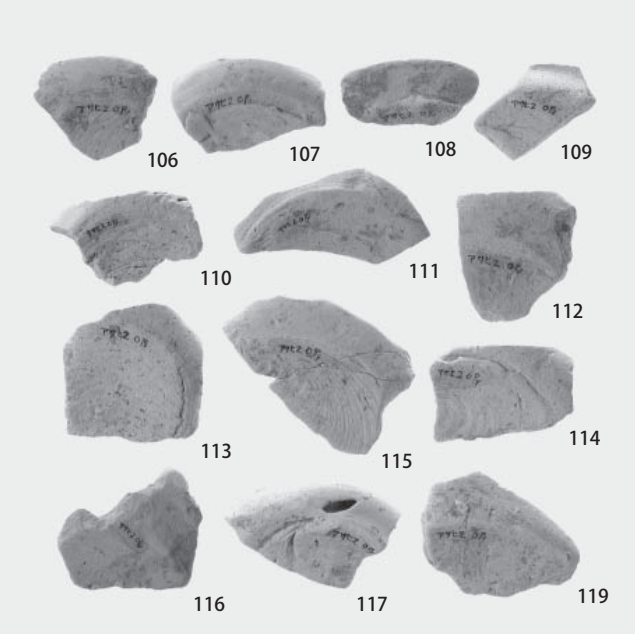
図版一二　0層・その他出土の遺物











報告書抄録

ふりがな	あさひにちょうめいせき
書名	旭２丁目遺跡
副書名	宮崎地方裁判所増築に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第 183 集
執筆・編著者名	二宮　満夫
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒 880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
発行年月日	2008 年 1 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あさひにちょうめいせき 旭２丁目遺跡	宮崎県宮崎市旭２丁目３－13	31°54′36″ 付近	131°25′41″ 付近	2007.07.06 ～ 2007.09.10	約 285 ㎡	宮崎地方裁判所増築に伴う調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
自然地形	弥生時代 後期以前	自然流路　1 条	弥生土器	周辺域の集落立地に影響を及ぼした自然流路の検出
集落	中世 ～ 近世	掘立柱建物跡　1 棟 門　1 基 井戸　2 基 土坑　8 基 溝　2 条	国産・輸入陶磁器 土師質土器 土錘 石製品（石臼・砥石）	溝によって区画された屋敷地の検出
生産地	近代	畝群および畝間溝群	髪留め ガラス瓶 銅銭	

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第183集

旭２丁目遺跡

宮崎地方裁判所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009年１月30日

発　　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171　　FAX 0985-72-0660

印　　刷　株式会社　文昌堂
〒885-0052　宮崎県都城市東町18街区1号
TEL 0986-22-1121　　FAX 0986-25-6408